中小規模河川古川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

## 小僧遺跡

2018.3

香川県教育委員会

## 序文

本書には、中小規模河川古川改修事業に伴い発掘調査を行った香川県東かがわ市川東に所在する小僧 遺跡(こぞういせき)の報告を収録しています。

小僧遺跡では、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物が出土し、遺跡における土地利用の変遷について、貴重な資料を得ることができました。また、自然河川から状態の良好な弥生時代後期や古墳時代前期後葉から中期前葉の遺物が出土し、古墳築造前後の集落等が近接して所在した可能性が想定されます。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県長尾土木事 務所及び関係諸機関、地元関係者各位に多大なご協力とご指導をいただきましたことに、深く感謝申し 上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月

香川県埋蔵文化財センター 所長 増田 宏

### 例 言

- 1 本報告書は、中小規模河川古川改修事業に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市川東に所在する小僧遺跡(こぞういせき)の報告を収録している。
- 2 発掘調査は香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター(当時)が調査 担当として実施した。
- 3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間 平成 12 年 1 月 1 日~平成 12 年 3 月 31 日 担当 主任文化財専門員 蓮本和博 技師 信里芳紀

- 4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。 香川県土木部横断自動車道対策総室(当時)、香川県長尾土木事務所、東かがわ市教育委員会、 地元自治会、地元水利組合 (順不同、 敬称略)
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司が担当した。
- 6 本報告書で用いる座標系は世界測地系(国土座標第Ⅳ系)で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。
  - SP 柱穴·小穴 SK 土坑 SD 溝 SR 自然河川 SX 性格不明遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線(単位:m)である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面を A 面、右側の面を B 面として記述する。剥片石器の場合は A 面が背面、B 面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

弥生土器:森下英治 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化 財発掘調査報告書第 29 冊 龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡』、香川県教育委員会・財香 川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相 - 集落の検討を中心にして - 」 『第 16 回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末~中期初頭の動態』、古代学 協会四国支部

信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年 - 凹線文期を中心にして - 」 『香川県埋蔵文化財センター研究紀要 I 』、香川県埋蔵文化財センター

信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院 統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・独立行 政法人国立病院機構善通寺病院

信里芳紀 2014 「讃岐地域における古墳時代前期の土器編年」 『古式土師器の編年的研究 - 四国 島の古墳時代前期の土器様相 - 』、四国考古学研究会

須恵器: 田辺昭三1981『須恵器大成』、角川書店

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし - 大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40 - 』 佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念 考古学論叢』、関西大学文学部考古学研究室

中世: 佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 18 冊 国分寺楠井遺跡』、香川県教育委員会・া断香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文 化財発掘調査報告第 4 冊 空港跡地遺跡 IV』、香川県教育委員会・(財香川県埋蔵文化財調査センター

# 本文目次

第1章	調査にいたる経緯と経過
第1節	調査にいたる経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2節	発掘調査と整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第2章	立地と環境
第1節	地理的環境 · · · · · · 3
第2節	歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第3章	調査の成果
第1節	調査の方法・・・・・・8
第2節	調査の目的・・・・・・・8
第3節	基本層序 · · · · · · 9
第4節	遺構・遺物・・・・・・・16
第4章	自然科学的分析の成果
第1節	樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第2節	放射性炭素年代測定 · · · · · · · · 45
第5章	まとめ
第1節	遺構の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

# 挿図目次

第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第	遺跡位置図 1 1 1 遺跡位置図 2 3 3 周辺遺跡分布図 5 調査区割図 8 I 区西壁土層断面図 1 10 I 区西壁土層断面図 2 11 I - ②区北壁土層断面図 2 11 I - ②区北壁土層断面図 1 13 II - ①区北壁土層断面図 1 13 II - ①区北壁土層断面図 2 14 II - ②区北壁土層断面図 2 14 II - ②区北壁土層断面図 2 17 I 区 SR02 土層断面図 1 17 I 区 SR02 土層断面図 1 19 II 区 SR02 土層断面図 1 20 II 区 SR02 土層断面図 2 21 II 区 SR02 土層断面図 2 21 II 区 SR02 土層断面図 3 22 I 区 SR02 出土遺物実測図 1 23 I 区 SR02 出土遺物実測図 1 23 I 区 SR02 出土遺物実測図 1 23 I 区 SR02 出土遺物実測図 2 25	第 18 図 第 19 図 第 20 図 第 21 図 第 22 図 第 23 図 第 24 図 第 25 図 第 26 図 第 27 図 第 28 図 第 29 図 第 30 図 第 31 図 第 32 図	I 区 SR02 出土遺物実測図 3 26 I 区 SR02 出土遺物実測図 4 27 II 区 SR02 出土遺物実測図 28 I 区柱穴出土遺物実測図 29 SK01・SK11・SK14 平・断面図 29 I 区鋤溝群平・断面図 30 I 区鋤溝群出土遺物実測図 31 SX01 平・断面・出土遺物実測図 32 II 区 SK02 ~ SK07 平・断面・出土遺物実測図 34 II 区 SK08 ~ SK10・SK12・SK13 平・断面図 35 SR01 平・断面・出土遺物実測図 1 36 SR01 出土遺物実測図 2 37 SR01 出土遺物実測図 2 37 SR01 出土遺物実測図 3 38 包含層等出土遺物実測図 3 38 包含層等出土遺物実測図 39 暦年較正結果 46 遺構変遷図 49
	表目	] 次	
第第第第第第第第 表表表表表表表表表表	土坑属性一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	第10表	石器観察表······56 木製品観察表·····56
	写真	目	次
図版 1 図版 2 図版 3	出土木材の光学顕微鏡写真(1) 43 出土木材の光学顕微鏡写真(2) 44 遺構写真1 58 遺跡遠景(南より) 遺跡遠景(南より)	図版 9	Ⅱ - ①区 SR02 下層流路 B 土層断面(南より) 遺構写真 7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
図版 4	遺跡返京 (南より) 遺構写真 2 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	図版 10	遺構写真8 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
図版 5	遺構写真3・・・・・・60 I - ①区 SR02 検出状況(北より) I - ①区 SR02 東半部全景(東より) I - ①区 SR02 西半部全景(西より)		遺物写真 1 (土器) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
図版 6	遺構写真4・・・・・・・61 I - ①区 SR02 北半下層遺物出土状況(西より) I - ②区全景(北より)		15 · 16 · 17 · 18 · 27 · 29 · 31 · 32 · 33 · 37 · 40 · 47 · 61 · 126 · 134 遺物写真 3 (石器)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
図版 7	Ⅱ - ①区全景 (東より) 遺構写真5・・・・・・・・・・・・62 Ⅱ - ②区全景 (北より) Ⅱ - ①区全景 (西より)	図版 14	69 · 70 · 71 · 72 · 73 · 74 · 75 · 100 · 101 · 102 · 143 · 144 · 149 · 150 · 151 · 160 · 161 · 162 · 163 · 164 · 180 · 181 遺物写真4 (石器・金属器)・・・・・・・・・69
図版 8	Ⅱ - ①区全京 (四より) Ⅱ - ②区全景 (北より) 遺構写真 6 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		週初与具4 (石碕・金属碕) 69 76・152・153・165 遺物写真5 (木製品) 70 77・78・79・166・167

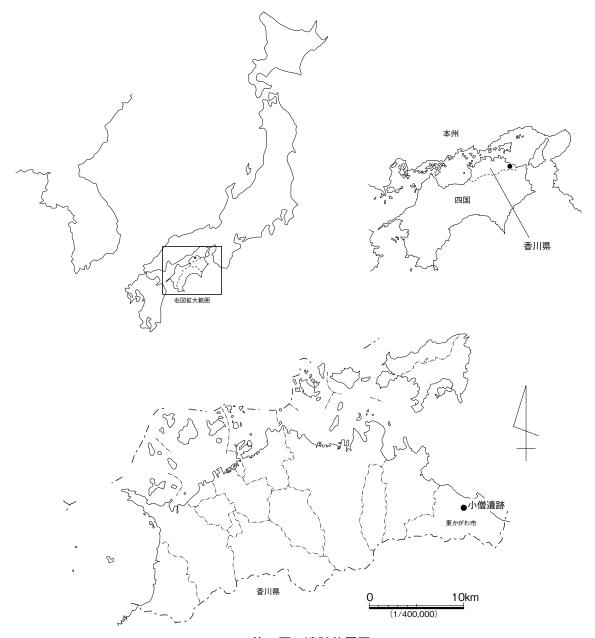
# 付図目次

付図 小僧遺跡平面図

#### 第1章 調査にいたる経緯と経過

#### 第1節 調査にいたる経緯

古川は、讃岐山脈に源を有し、北流して秋葉山等の周辺丘陵の落水を拾い、瀬戸内海に注ぐ二級河川である。古川の改修事業は、香川県長尾土木事務所が主体となり、下流域より随時工事が実施されてきたが、古川の上流、山麓部より与田川が形成した沖積扇状地への出口付近に、四国横断自動車道(津田~引田間)とインターチェンジの建設が予定され、これを機にインターチェンジ部分とそこから北側へ延長 600m ほどの河川改修事業が新たに計画された。平成 10 年度に本事業に伴う用地買収が進展したことを受け、香川県教育委員会では事業予定地内の分布調査を実施した。その結果、対象地の北半分には条里型地割が良好に残存することが判明した。事業面積が広大であること、工事の内容が現河川の拡



第1図 遺跡位置図1

幅や一部バイパス河川の開削を伴うものであることから、香川県長尾土木事務所と協議を実施し、埋蔵 文化財の保存協議に必要な資料を得るため、事業実施前に試掘調査を行うことで合意した。

平成 10 年 10 月 6 日・7 日に試掘調査を実施した結果、弥生時代や中・近世の遺構・遺物が確認され、「小僧遺跡」として文化財保護法に基づく事前の保護処置が必要と判断された。この結果を受けて、再度香川県長尾土木事務所と協議を実施し、平成12年1月~3月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センター(当時)に委託して発掘調査を実施することとなった。なお、試掘調査の詳細については、報告書(香川県教育委員会1999『埋蔵文化財試掘調査報告XII 香川県内遺跡発掘調査』)を参照されたい。

#### 第2節 発掘調査と整理作業の経過

発掘調査は香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として、 平成11年4月1日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を両者の間で締結して実施した。発掘調査は 直営方式により実施し、発掘調査期間は平成12年1月1日~同年3月31日、発掘調査面積は1,611㎡ であった。

整理作業は、平成29年5月1日から同年6月30日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と、遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28%入りコンテナ24箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。なお、遺物の実測・浄書の一部については株式会社イビソクに委託した。

発掘調査及び整理作業の体制は下表のとおりである。

平成11年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 文化行政課			財団法人香川県地	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長 課長補佐	小原 克己 小国 史郎	総括	所長 次長	菅原 良弘 川原 裕章	
総務	係長 係長 主査	中村 禎伸 三宅 陽子 松村 崇史	総務	副主幹兼係長 副主幹兼係長 係長	六車 正憲 田中 秀文 新 一郎	
埋蔵文化財	副主幹 係長 文化財専門員	廣瀬 常雄 西村 尋文 森 格也		主査 主査 主任主事	長尾 寿江子 山本 和代 細川 信哉	
	主任技師	塩崎 誠司	調査	参事 主任文化財専門員 主任文化財専門員 文化財専門員	長尾 重盛 大山 真充 連本 和博 西岡 達哉	
				技師 嘱託 (調査技術員)	信里 芳紀 東条 貴美	

平成29年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事	務局 生涯学習·文化財課		香川県埋蔵文化財	香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	小柳 和代	総括	所長	増田 宏	
	副課長	片桐 孝浩		次長	森 格也	
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	森 格也 (兼務)	
	副主幹	松下 由美子		副主幹	斎藤 政好	
	主事	和木 麻佳		主任	高橋 範行	
文化財グループ				主任	丸尾 麻知子	
	課長補佐	片桐 孝浩 (兼	務)	主任	岩崎 昌平	
	主任文化財専門員	信里 芳紀		主任	横井 隆史	
	主任文化財専門員	乗松 真也	資料普及課	課長	古野 徳久	
				主任文化財専門員	蔵本 晋司	
				嘱託	大山 和子	
					加藤 恵子	
					小林 奈充子	
					佐々木博子	
					山本 基公美	

#### 第2章 立地と環境

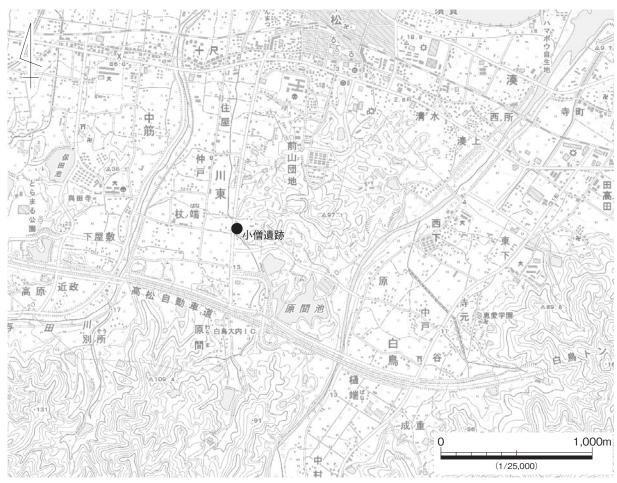
#### 第1節 地理的環境

遺跡は、東かがわ市川東に所在する。調査前の地目は、耕作地として利用されていた。

四国は、本州・北海道・九州とともに日本列島を構成する主要4島の一つで、面積約18,300kmと4島の中では最小である。南部は太平洋に、東~北部は紀伊水道や瀬戸内海を介して本州に、西部は豊後水道を介して九州に、それぞれ面する。地形面では、四国の北半部を東西に走行する中央構造線により、それ以北の西南日本内帯と、以南の西南日本外帯に区分される。外帯には、最高標高1,982 mの四国山地が構造線に沿って東西に聳え、以南の太平洋側は温暖で多雨なのに対して、以北の瀬戸内側は温暖で少雨と気候が相違する。この気候に対応して、瀬戸内側では弥生時代より土器製塩が盛んに行われてきた。

香川県は四国の北東部に位置し、南縁には最大標高約1,060 mの等高性に優れた讃岐山脈が東西に走行し、徳島県との県境となる。

遺跡が所在する東かがわ市大内・白鳥地域は、北は瀬戸内海に面し、東~南~西は与治山や虎丸山、北山等の標高約200~400mの山塊に囲繞された、面積約9.7kmの閉鎖的な臨海性の小平野を中心とする。 平野部東半は中川と湊川が、西半は与田川と番屋川、古川がそれぞれ北流し、流域に扇状地性の谷底平



第2図 遺跡位置図2(国土地理院発行1/25,000地形図「三本松」に一部加筆して掲載)

野や氾濫平野を形成する。河口域には、現海岸線に平行して数列の砂州・砂堆が形成され、その背後に は海岸平野・三角州が広がる。現在三角州は、その多くが盛土され市街地へと変貌している。

平野部に接する山塊は、後期白亜紀の珪長質深成岩類(領家帯)によって形成され、その奥部の讃岐 山脈には、後期白亜紀の海成礫岩や泥岩、砂岩等が分布する和泉層群が東西走する。与田・番屋川は領 家帯に水源があり、流域は花崗岩質の堆積層を形成し、湊川の水源は和泉層群に達し、河床には砂岩等 の堆積岩が花崗岩類に混じって多く認められる。弥生時代以降、和泉層群の砂岩の転石は、敲石や砥石 として多く利用されたようだ。

遺跡は、与田川・古川等の営力によって形成された、平均勾配約 4.4%の扇状地性平野の南東隅部に位置する。扇状地上面は最大比高 1 m前後の波状の起伏を呈しており、凹地部分は扇状地の旧中州間の網状流跡・旧低水路と考えられる。扇状地中央部に位置する仲戸遺跡の発掘調査では、縄文時代後期や弥生時代終末期前後に埋没した自然河川(旧低水路)を検出(香川県教育委員会 2016)しており、扇状地の形成は縄文時代後期以前に遡ることが明らかとなっている。

また、与田川の東西両岸には、比高 0.5 m前後の小崖が幅 100 ~ 150 mの幅で連続しているのが確認できる。この崖面は、瀬戸内海東部の臨海平野で指摘された完新世段丘(高橋 1990)に相当し、その形成時期は古代末頃と想定されている。上述した段丘上面に展開する旧低水路等の埋没下限が、弥生時代終末期前後とする時期と矛盾しない。

本地域は、上述したように自然地形により画された閉鎖的な空間を形成するが、東は中川上流の帰来山と翼山の間の小峠を介して引田地域と、南は湊川上流の鵜の田尾峠(標高約370 m)を介して徳島県吉野川下流域と、西は番屋川上流の北山南麓の小峠を介して津田湾沿岸地域や、田面峠(標高約50 m)を介して長尾盆地と、陸路によりそれぞれ連絡することが可能で、さらに各河川を利用した内陸部との舟運や、湊川あるいは与田川河口部に想定される『兵庫北関入舩納帳』(林屋編1981)に記された「三本松」など臨海部の港津を介して、海上交通により遠隔地ともアクセス可能な、交通の結節点としての恵まれた条件が付与された地域と評価できる。

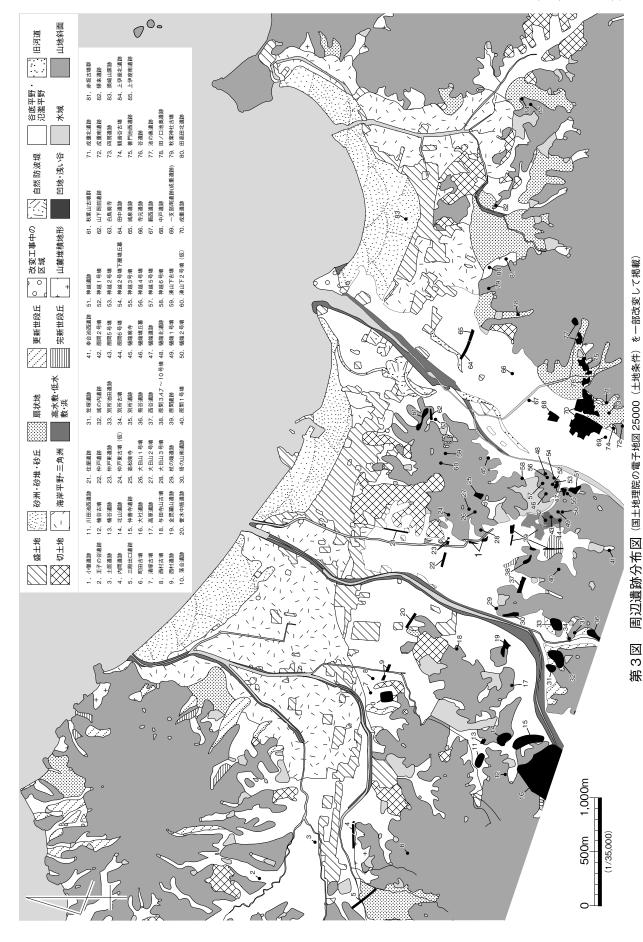
#### 第2節 歷史的環境

#### 縄文から古墳時代の動向

上述した陸路や海路の利用は、原間遺跡の自然河川より、結晶片岩粒の混入した縄文時代中期と晩期前半の土器が出土(香川県教育委員会 2005)し、田中遺跡からは結晶片岩製の石棒が出土(香川県教育委員会 2017)しており、遅くとも縄文時代に遡る可能性があることが考古資料から実証される。

さて、本地域の遺跡は、第3図に示したように、現状では谷底平野や氾濫平野、扇状地上に集落関係の遺跡が、丘陵上に古墳や墳墓等の遺跡がそれぞれ分布する。推定南海道も、海岸平野や三角州が内陸部にまで入り込む番屋川流域の松崎地区周辺を除けば、概ね氾濫平野上を中心に、本地域を横断すると考えられている(金田1988)。今後の詳細な分布調査や試掘調査を待つ必要があろうが、海岸平野や三角州地域の開発は、中世後半期以降に遅れる可能性が高いと考えられる。

一方、氾濫平野の本格的な開発行為は、おそらく弥生時代に遡る。本地域での遺跡分布は、弥生時代 中期中葉を除けば、後期中葉までは散漫であることが指摘されている。後期後半から終末期にかけて、 鍛冶関連遺物を伴う竪穴建物等が検出された原間遺跡をはじめ、地域内で遺構や遺物が出土した遺跡数



- 5 -

は、中期後葉と比較して倍増する(信里2004)。飛躍的に地域内の開発が進展したことは間違いない。

そうした動向と併行して、大型建物への金属器や玉類等の非自給物資の集中や、水銀朱を使用した葬送儀礼が行われた樋端墳丘墓の築造等、地域内での階層差が顕在化する。中期中葉の池の奥遺跡における磨製石斧類の集中保有は、集落間での分業体制の成立とともに、上記した階層化社会を準備したとも考えられる。

仲戸遺跡、仲戸東遺跡で実施した花粉分析の成果(香川県教育委員会 2016)からは、縄文時代晩期から弥生時代終末期の間においてアカマツ林の相対的拡大が示され、その傾向は古代へと継続することが示された。これは遺跡周辺の丘陵部に自生していた照葉樹林等が林産資源の利用拡大により伐採され、二次林であるアカマツ林へと転換したこと、つまりは周辺の植生に大きなダメージを与えるような大規模かつ恒常的な開発行為がなされたことが想定され、上記した考古学的な状況を補完する。

こうした諸開発行為の延長上に、全長約38mの前方後円墳である大日山古墳の成立を位置付けることができよう。その後、中期には近年刳抜式石棺が調査された秋葉山古墳群中の岡前地神社古墳や、韓半島との関係が想定される原間6号墳、後期には多彩な形象埴輪が出土した仲戸東遺跡等、時期により多様な様相を示しながら古墳が築造され、そこには吉備や畿内といった他地域との関係も垣間見ることができる。

#### 古代の大内郡

律令期には、大内郡が置かれ、管内には引田・白鳥・入野・与泰の四郷があった。遺跡周辺は与泰郷に含まれる。大内郡はもと小郡であったが、『続日本後紀』承和十年(843)5月8日条に「又讃岐国大内郡小郡。只有 $_{-}$ 領帳 $_{-}$ 。領則 $_{\nu}$ 領調入 $_{\nu}$ 京。帳猶留 $_{\nu}$ 国釐 $_{\nu}$ 務。非常移 $_{\nu}$ 病。无 $_{-}$ 人従 $_{-\nu}$ 公。加郷戸田数。既堪 $_{-}$ 下郡 $_{-}$ 。改爲 $_{\nu}$ 下。加 $_{-}$ 領一員 $_{-}$ 焉。」(黒板 1971)とあり、郷戸田数の増加などを理由に下郡に改め、領一員を加えている。

なお、天平十九年(747)2月11日の『法隆寺伽藍縁起幷流記資財帳』(正倉院文書)の寺領荘園について記した部分に、「大内郡一処」とあり、郡内に法隆寺領の荘園があったとされるが、具体的な場所やその後の変遷については明らかではない。

白鳥に所在する白鳥廃寺は白鳳期創建の可能性が説かれ、過去の調査により塔や金堂とみられる基壇や心礎石が、近年の調査では僧坊とみられる掘立柱建物がそれぞれ検出され、一町四方の寺域に南滋賀廃寺式の伽藍配置が想定されている。また秋葉山南麓には、平安時代に高松廃寺が創建されている。小規模な寺院であったようだが、付属する瓦窯2基が調査されている。古代においては、秋葉山周辺が本地域の宗教センターとして機能していたと考えられる。

一方式内社は、水主の水主神社があり、承和三年(836)に従五位下に除された(『続日本後紀』)のを史料上の初見として、天慶三年(940)には藤原純友の乱平定祈願の功により正五位下を授けられている(『長寛勘文』)。また、平安末期に書写されたとされる大般若経を収める経函が至徳三年(1386)に作られ、その裏書に天承元年(1131)や長承二年(1133)等の国司や目代の神拝とともに、社領の寄進がなされたことが記される。郡内唯一の式内社であり、讃岐国内でも有力社として評価されている(野中 1982)。

これら宗教施設は、自然地形により集落が展開する平野部とはやや隔絶された場所に造営され、例えば白鳥廃寺が古代南海道の湊川渡河点至近地に位置しているように、水陸交通路の結節点に位置し、人・

モノ・情報のネットワークにアクセス可能な場所が巧みに選地されているように思われる。当時の宗教 施設が有する機能の一端を示すものであろう。

#### 中世への展開

鎌倉時代には大内郡は一円所領化され、皇室の御願寺領として京都浄金剛院領大内荘が成立し、天皇家に伝領された。与田郷の地頭に小早川氏がみえ、『小早川本仏譲状案』(小早川家文書)によれば、小早川氏が有した所職は地頭職以外に、公文・案主・田所等の諸職に及ぶ。嘉応二年(1170)に讃岐国は建春門院の院分国となり、国司としてその弟平親宗が任じられると、讃岐国は平家とのつながりを深める。その際国衙領であった大内郡は、平家の所領に編入され、鎌倉時代に平家没官領として、皇室所領大内荘が成立した可能性も考えられる。

本地域の中世の遺構・遺物は、本遺跡以外には、王子の谷、三殿出口、内間、西村、誉水中筋、仲戸、原間、成重、田中、城泉の各遺跡で確認されている。遺跡により時期差を認めるものの、平野部の開発が広域的になされていたことを物語る。

さて、本遺跡と与田川を挟んで対岸、直線距離にして約850 m北西には、四国八十八箇所奥院として参詣者で賑わう、与田寺が所在する。与田寺は、医王山虚空蔵院と号し、真言宗善通寺派に属し、本尊は薬師如来である。寺の『与田寺旧記』には、天平十一年(739)行基により創建され、当初の寺域は八町四方あり、医王山薬師寺と号し法相宗であったが、空海により、真言宗に改め、鎮護国家の勅願所としたという。寺の創建については、同時代の史料を欠くため実証は困難であり、発掘調査など考古学的な研究に依らなければならない。史料上の初見は、東かがわ市与田山にある若王寺所蔵の応永六年(1399)から同九年(1402)に書写された『若一王子大般若経』の奥書に「虚空蔵院住持金資生年三十七」という増吽の署名があり、遅くとも15世紀初頭には増吽により再興されていたことは間違いない。本尊の薬師如来は12世紀の作とされ、13世紀の絹本着色仏涅槃図や、同時期の絹本着色稚児大師像、李朝初期(15世紀初頭)の可能性のある絹本着色地蔵曼荼羅図、応永十四年(1407)に増吽が願主となり聖宥が彫版した十二天像版木などが伝わる。また、寺の背後の山裾に2基の宝篋印塔があり、鎌倉末期から南北朝期のものとされる。これら宝物の伝来については明らかではないが、12~13世紀頃には何らかの堂宇が建てられていた可能性が考えられよう。

#### 引用・参考文献

香川県教育委員会 2001 『原間遺跡 古川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』

香川県教育委員会 2005 『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原間遺跡』

香川県教育委員会 2016『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊 仲戸遺跡・仲戸東遺跡』

香川県教育委員会 2017 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 田中遺跡』

金田章裕 1988 「讃岐の条里遺跡」 『香川県史』 第一巻通史編, 香川県

黒板勝美編著 1971 『新訂増補国史大系〔普及版〕 続日本後紀』吉川弘文館

高松市歴史資料館 1996 『讃岐の古瓦展』

高橋学 1990「地形環境分析からみた条里遺構年代決定の問題点」『条里制研究』第6号,条里制研究会

野中寛文 1982「大水主社領の範囲と構造」『香川の歴史』 2号

信里芳紀 2004「東讃地域の弥生集落の動態」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 47 冊 成重遺跡 I 』, 香川 県教育委員会

萩野憲司 2004「讃岐国水主神社所蔵『外陣大般若経』と『北野社一切経』について」『佛教大学総合研究所紀要』別冊 2 林屋辰三郎編 1981『兵庫北関入舩納帳』,中央公論

#### 第3章 調査の成果

#### 第1節 調査の方法

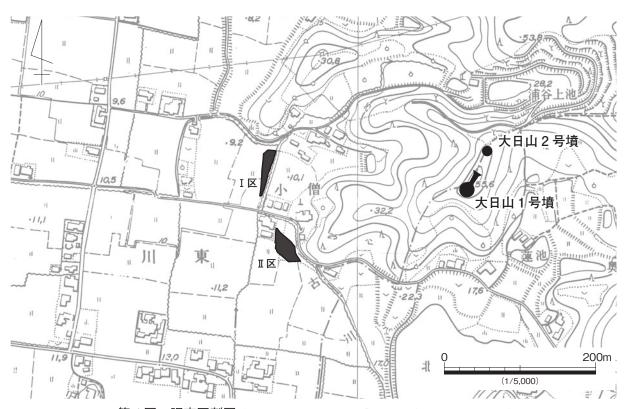
調査対象地は、河川改修予定地で、東西幅  $19 \sim 22 \, \mathrm{m}$ 、南北延長  $44 \sim 60 \, \mathrm{m}$ の南北に細長い調査区であった。また、試掘調査の結果により、調査地は南北の 2 調査区に分かれ、第 4 図に示すように北側の調査区を 1 区、南側の調査区を 1 区とし、掘削土の処理等により、各々の調査区を南北に二分して、計 4 調査区に区分して調査を実施した。各調査区の北半調査区を①区、南半調査区を②区として、以下 1 - ①区、 1 - ②区等と記述する。調査前の地目は、いずれも水田などの耕作地であった。

調査は、直営方式により実施し、後述する I 区第 3 遺構面、II 区第 2 遺構面検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力により掘り下げ調査を行った。測量に要する基準杭は、業者に委託して設置し、平面図も業者に委託して航空測量により図化した。それ以外の土層断面図や遺物出土状況図等の作図や、遺構や遺物出土状況等の写真撮影は、調査員が行った。

各調査区は狭小なため、グリットは設定せず、包含層等出土の遺物は調査区単位で取り上げた。遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、すべて北より新たな番号を付して統一した。遺構の種別については、調査時の担当者の所見を尊重しつつ、遺構の性格を考慮して一部変更した。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲した。

#### 第2節 調査の目的

本遺跡の調査では、既述したように試掘調査の結果、弥生時代から中世の遺構・遺物が出土しており、



第4図 調査区割図 (国土地理院発行国土基本図「IV-FF49」を一部改変して掲載)

近接して本地域唯一の前期前方後円墳である大日山古墳(1号墳)が所在することから、古墳との関連 を示す集落等が所在する可能性を想定し調査を実施した。

調査の結果は、後述するように大日山古墳との関連を示す遺構・遺物の出土に恵まれなかった。しかし、自然河川から状態の良好な弥生時代後期や古墳時代前期後葉~中期前葉の遺物が出土し、古墳築造前後の集落等が近接して所在する可能性が示唆されたことは、今後の周辺地域での調査に期待を抱かせるものである。また、中世から近世にかけての耕作痕跡が確認され、遺跡周辺における土地利用の変遷について資料が得られたことも、成果としてあげられよう。

#### 第3節 基本層序

土層序の観察は、各調査区の南北方向と東西方向の調査区壁面にて行った。調査区は、上述したように耕地として利用されており、一部に工事に伴う造成土がそれら耕作土上面に堆積していた。造成土を除いた現地表面の標高は、I区で10.3 m前後、II区で11.2 m前後をそれぞれ測り、調査区は北に緩やかに降る緩斜面上に位置する。以下、各調査区ごとに基本層序について報告する。

I 区では、近・現代の耕作土や旧耕作土等(第5・6図1~5層・第7図1~4層)下で、第1遺構面となる自然河川 SR01 及びその西側の旧耕作土層群(第5・6図6~21層、第7図5~17層)上面が露出する。本層群は I 区全面に堆積が確認され、出土遺物等より近世以降の堆積層と考えられる。なお、本層群検出面の標高は 9.9 m前後であった。

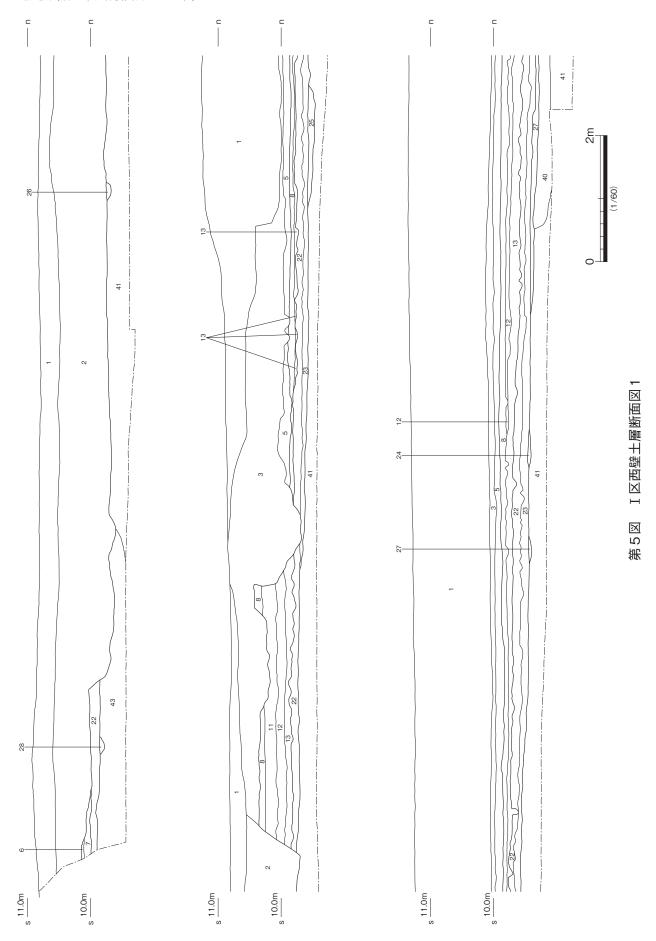
SR01 堆積層下で、2層に細分される灰色系の水平堆積層(第5・6図22・23層、第7図18・19層)を確認し、畦畔の可能性のある高まりも断面観察で認められたことから、水田等の作土層の可能性を想定した。調査記録では中世水田層としているが、本層からは遺物が出土しておらず、細かな時期を特定することは困難である。後述する鋤溝群やSR02上層より後出することから、上限を13世紀後半代に置くことができる。本層上面を第2遺構面とする。なお、本層検出面の標高は9.3 m前後であった。本層下面は、後述する自然河川SR02の影響によりわずかに東へ傾斜する。

第2遺構面下面において、多条の鋤溝群(第5・6図24~28層、第7図20~22層)と自然河川SR02(第5・6図29~39層、第7図23~40層)を検出した。これを第3遺構面とする。検出面の標高は9.1~9.2mであった。既述したように、調査時には本層検出面まで重機により掘削した。

第3遺構面のベース(第5・6図40~43層、第7図41・42層)には、灰色ないし黄色系粗砂・粘土が堆積し、SR02堆積以前の旧古川の流路堆積層と考えられ、調査記録では、本層から遺物は出土しておらず、無遺物層となっている。しかし、後述するようにⅡ区では、同様のSR02に先行する流路の水成堆積層中より、縄文時代の遺物が出土したことが記録され、本層群も縄文時代の流路堆積層である可能性が想定される。

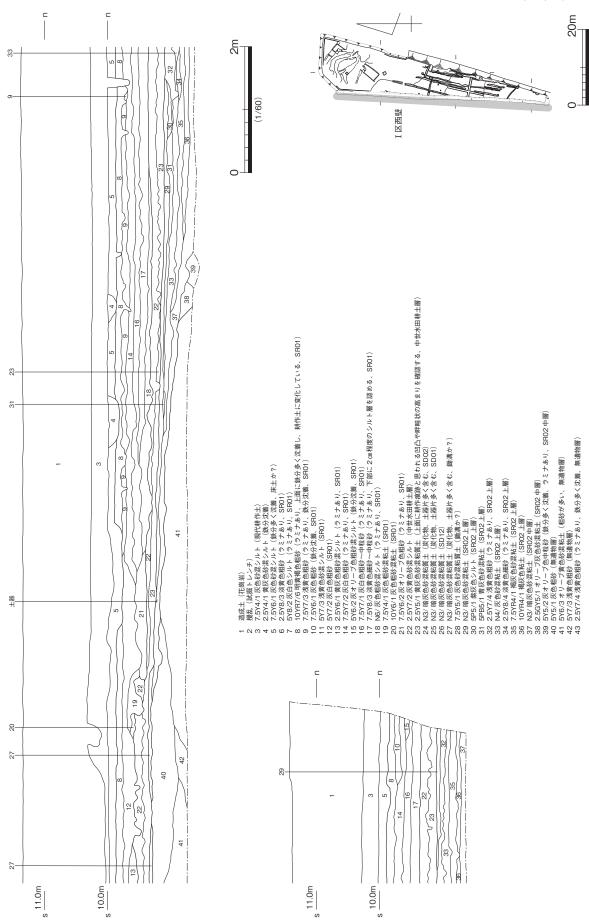
Ⅱ区では、現耕作土等(第8・9図1~3層・第10図1~3層)下で、近世以降の旧耕作土層と考えられる灰~黄色系シルトないし粘質土を主体とする水平堆積(第8・9図4~9層・第10図4~8層)を確認した。一部に旧古川(SR01)の溢流堆積層(第8・9図6層)を認める。本層群検出面を第1遺構面とする。SR01の出土遺物については、第28~30図に掲載した。

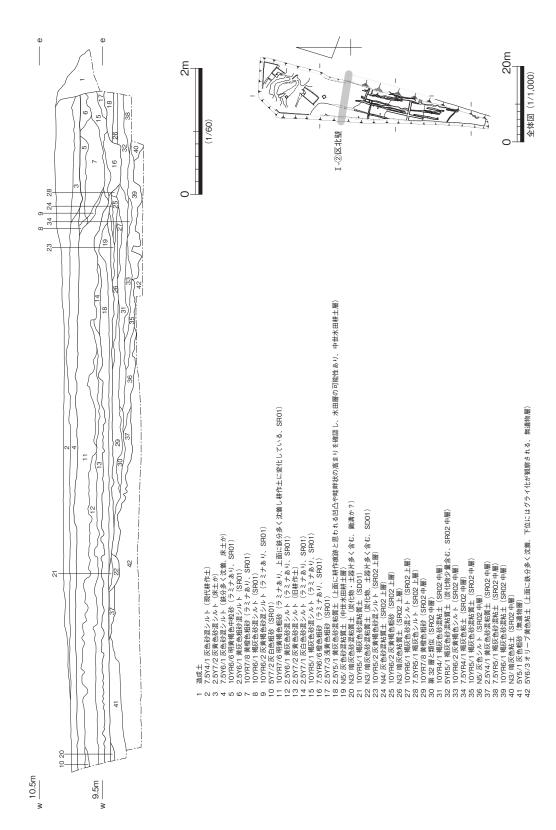
上述した近世以降の旧耕土層群下面で、灰色系粘質土等の水平堆積層(第8・9図 10 ~ 13 層、第



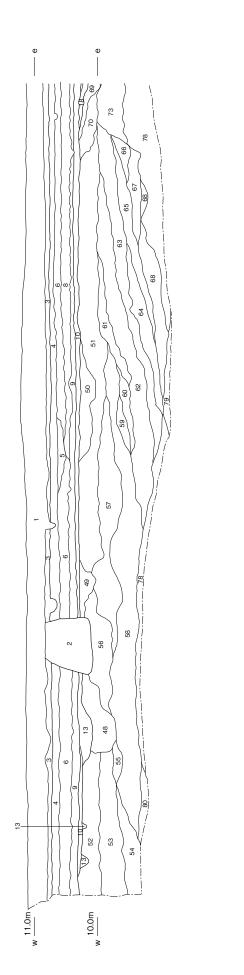
全体図 (1/1,000)

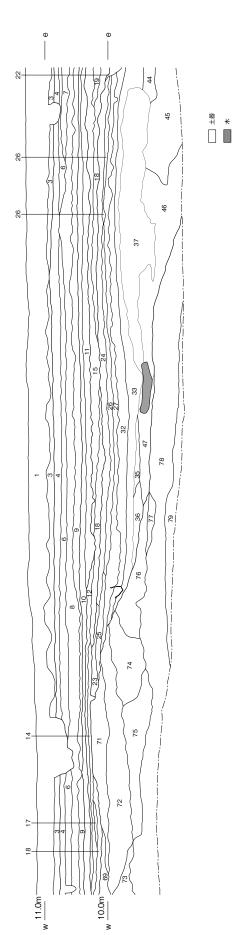




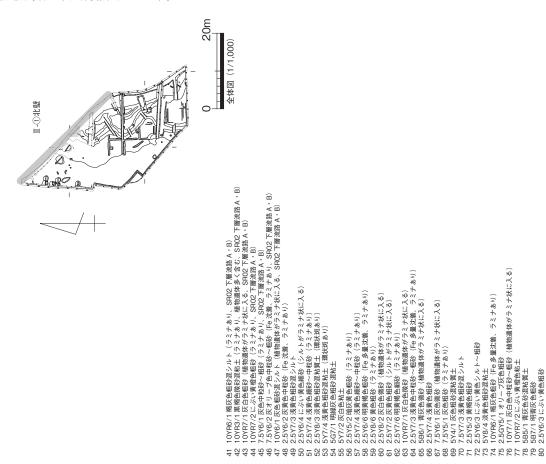


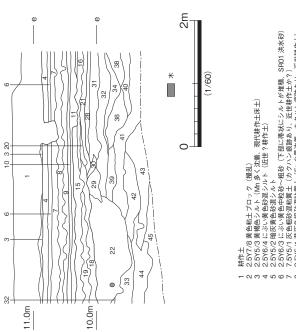
2<u>m</u>

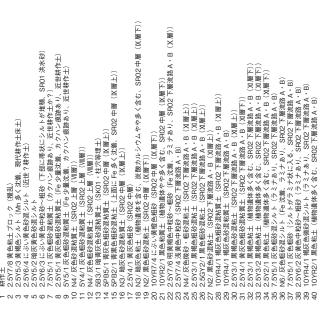


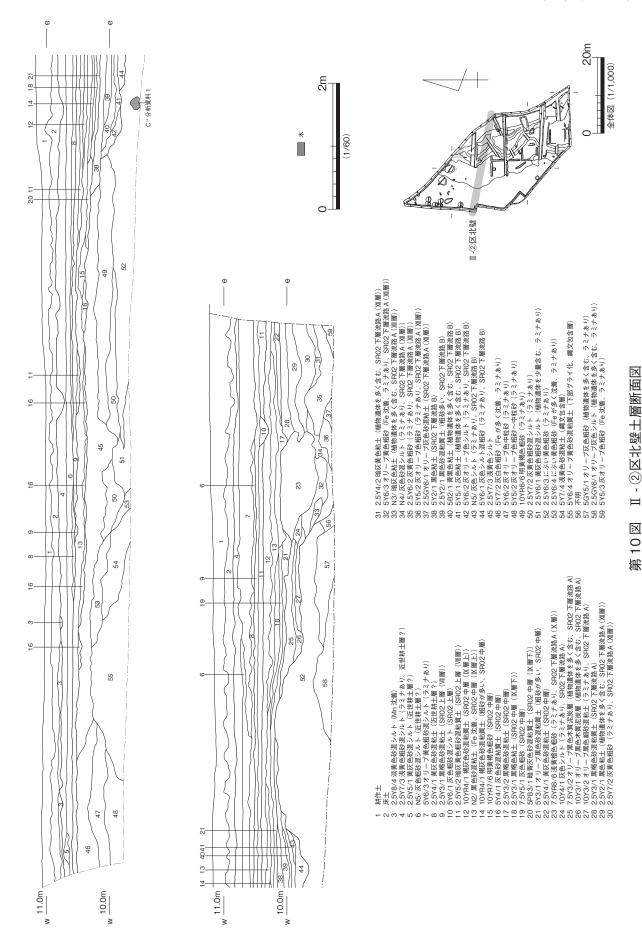


第8図 II-①区北壁土層断面図1









– 15 –

10 図 9 ~ 11 層)が検出され、SR02 上層として調査した。遺物は中世前葉を主体とする土師質土器等が出土しており、当該期の耕土層群と考えられる。本耕作土層群下面で、土坑 SK01 や柱穴等の遺構(第8・9 図 13 層)を検出した。上記した中世耕作土層群検出面を第2遺構面とする。

第2遺構面下面は、灰色系粘質土や褐色系粘土・粗砂層がラミナ状に堆積を繰り返しており(第8・9図14~21層・第10図12~22層)、SR02中層として調査した。本層群からは、古代を下限とする遺物が出土しており、SR02埋没の最終堆積層と考えられ、本層群の堆積により、遺跡周辺の地形面はほぼ平準化されたと考える。本層群検出面を第3遺構面 a とする。

第3遺構面 a 堆積層の下位は、SR02 機能時の堆積層と考えられ、粘土・粗砂等のラミナ堆積を顕著に認める(第8・9図22~47層・第10図23~44層)。SR02下層として調査した。南半調査区では流路が2条に分かれ(東側流路を流路A、西側流路を流路Bとする。)、北半調査区では合流して北へ流下する。また、北半調査区の土層記録から、両流路に明瞭な先後関係は認められず、同時並存していたものと考えられる。本層群からは、弥生時代前期の遺物がまとまって出土した。本層群を第3遺構面 b とする。

第3遺構面 b のベースにも、粘土や粗砂のラミナ堆積等が連続(第8・9図48~80層・第10図45~59層)し、旧古川の流路堆積と考えられる。本流路堆積層からも、縄文時代の遺物の出土が記録されている。しかし、本報告書作成時に確実に本層出土と考えられる遺物は、ベース層出土とされる第31図 181のサヌカイト製のスクレイパー1点のみであり、詳細を明らかにはできない。しかし、上述した SR02 からは、少量の縄文時代後期に位置付けられる遺物が出土しており、それらの遺物は本来本層群の流路に帰属していた可能性は想定される。なお、本層群堆積層(第10図52層)より出土したクスノキの自然木1点(試料No年代05)について、放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細は第4章を参照されたいが、縄文時代後期後半となる報告を得た。

#### 第4節 遺構・遺物

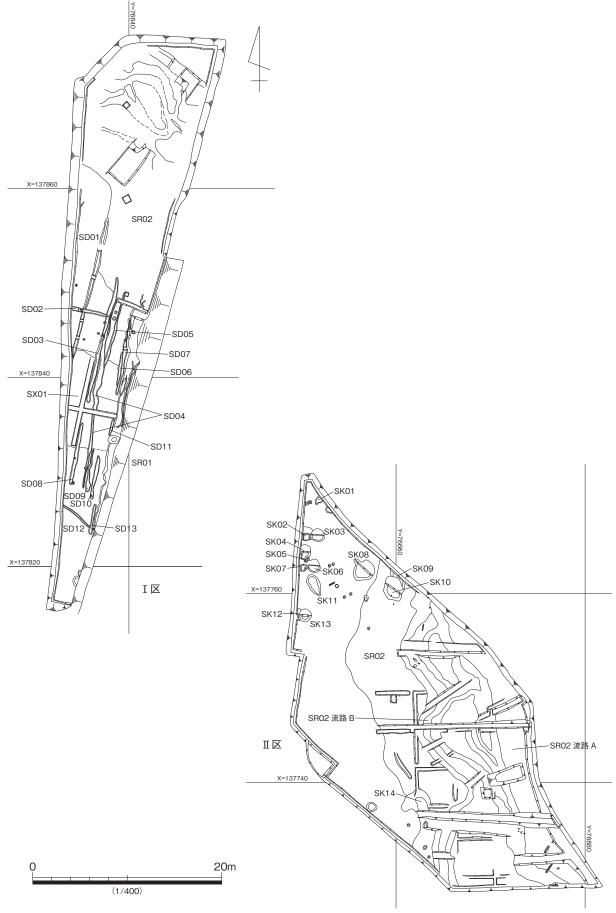
弥生~古墳時代

自然河川

#### SR02 (第 12 ~ 20 図)

I 区第3遺構面、Ⅱ区第3遺構面 b で検出した、古川の旧流路と考えられる自然河川である。Ⅱ区南東部より調査区東端部を緩やかに蛇行しながら北流し、I 区北半部で大きく北西方向へ屈曲する。流路方向は、現河道と大きくは変わらない。両調査区は約90 m離れているが、検出位置や埋土、出土遺物より一連の自然河川と判断した。検出面幅は、I 区で16.7 m以上、Ⅲ区で15.8 m以上、残存深は、I 区で1.65 m、Ⅲ区で1.80 m以上、流路底面の標高は、I 区で約7.4 mをそれぞれ測る。Ⅲ区では、掘削法面の崩落の危険により底面まで掘り下げておらず、流下方向は特定できないが、地形面の傾斜方向から北へ流下していたと考えられる。

埋土は30層以上に細分され、前節で一部既述したように上・中・下の3層に大別する。上層は、暗色系粘土を中心とする水平堆積層で、一部に粗砂等の洪水堆積層を介在するが、基本的に低湿地状を呈して穏やかな環境下で堆積したと考えられる。II区では、本層最上位層が調査区全面に堆積(第8・9図10層)し、当該期の耕作土層を形成する。中層も、上層と同様に暗色系粘土による低湿地状の堆積



第11図 遺構配置図

を主体として認めるが、一部に細~中粒砂の水成堆積層を認め、冠水と離水が繰り返される環境下にあったとみられる。下層は、砂層等のラミナ堆積が卓越する水成堆積層である。 II 区では、下層流路は本流とみられる東側の流路Aと、西側に小規模な流路Bの二つの流路が検出され、II 区北半部で合流する。両流路に明確な切り合い関係は認められない。

遺物は、28ℓ入コンテナ8箱程度出土した。これらの遺物は、細かな層位ごとに取り上げがなされており、詳細は巻末観察表を参照されたい。以下では、上述した大別3層に分けて記載する。層位別には下層出土資料が最も多く、本流路出土資料の約半数を占める。中層からの遺物の出土は乏しく、上層では再び出土量が増加する。こうした遺物出土量の層位別推移は、調査区周辺での諸開発行為と連動したものであることが予想される。

 $1\sim5\cdot7\cdot9\sim18\cdot20\sim33\cdot36\cdot37\cdot73\cdot74\cdot77\cdot80\sim91\cdot102$ が下層出土の遺物である。このうち I 区北端部下層より、古墳時代前期を中心とする遺物  $4\cdot5\cdot9\cdot11\sim18\cdot20\cdot21\cdot23\cdot25\sim29\cdot31\cdot32\cdot36\cdot73$  がまとまって出土した(図版 6)。 $16\cdot17\cdot27\cdot32$  等完形もしくは完形に近く復元される資料を含み、焼成後に穿孔された直口壺 16 も認められることから、祭祀等に使用された後一括して投棄されたと考えられる。また、II 区でも、北端部下層より弥生時代前期の資料がまとまって出土したことが記録される。 $80\cdot85\cdot87\cdot90$  がII 区下層流路 A、 $B1\sim84\cdot86\cdot88\cdot89\cdot91\cdot102$ が同流路 B 出土の遺物である。

1~3・80~81 は縄文土器の小片である。1 は後期初頭中津式の縄文土器浅鉢として図化した。器表面の摩滅が顕著なため、別の器形となる可能性もある。3 は縄文土器深鉢。80・81 は無文系深鉢の小片で、81 は中期末~後期前葉頃、80 は後期中葉を前後する時期と考える。いずれも小片であり、前節で既述したように混入資料の可能性が高い。

4・5・7・9・10・82~89・91 は弥生時代前期に位置付けられる資料で、甕が主体を占める。84のようにほぼ完形に復元される資料等を含むが、器表面の磨滅や剥落等を顕著に認める資料もある。88の体部外面は、被熱のためか器表面の剥離が顕著である。壺は体部片 2 点 82・83 があり、82 は外面に 5条以上の、83 は8条以上のそれぞれへラ描き直線文で飾る。中形甕では、中層出土資料を含め、如意形口縁で、7・9・10・87・88 にみられるように頸部下に 3 条ないし 4 条の主にへラ描き沈線を施し、10・88 等口縁端部を刻み目で飾るものを一定数認める。7 は、後述する中層出土の8と同一個体の可能性があるが、接合はしない。一方小形甕84~86では、無文のものを認める。91 は甕とみられる底部片で、外底面には植物種実圧痕を認める。壺等の良好な資料を欠落し、器種組成等の制約は大きいが、甕では如意状口縁が主体を占め、櫛描き文出現直前の様相と捉えることから、森下編年前期 II b~II c 期に位置付けられると考える。なお、II 区下層流路 B は、出土遺物の大半が当該期の資料で占められる。

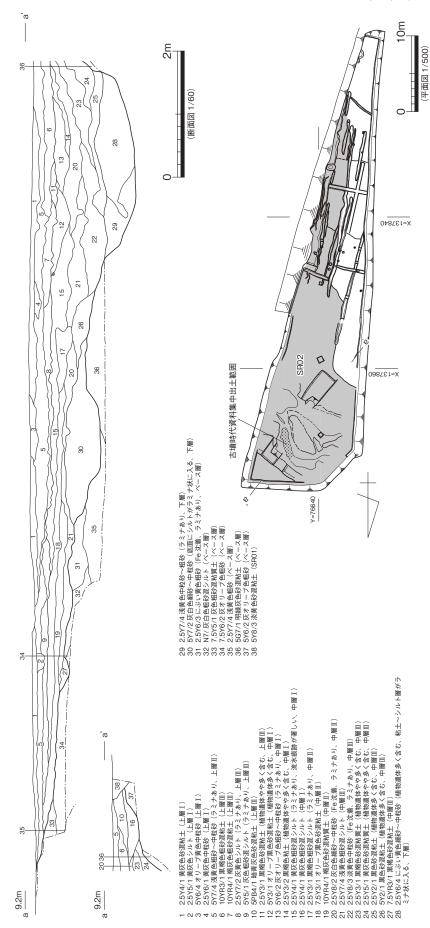
11~14 は、弥生時代中期後葉を前後する時期の資料で、出土量は僅少だが I 区を中心に出土した。 11 は甕の体部片。最大径部上位に櫛状工具による刺突文を巡らす。12 も甕の体~底部片で、内面には 炭化物が付着する。

16~18・20・21・23~27・90 は、上述したように I 区北端部を中心に出土した、古式土師器の 資料である。各器種が揃い、また完形もしくは完形に近く復元される資料も多く出土している。このう ち、在地系の広口壺 90 や、在地系甕 20、布留系甕 21、有稜高杯 28・29 は、他の一群の資料より古く、 古墳時代前期前葉に位置付けられる可能性がある。16・17 の直口壺は、いずれもほぼ完形品で、体部

外面には使用に伴うとみ られる煤が付着する。ま た、16の体下半部には、 長径 1.7cmの不定形な焼 成後の穿孔を認める。外 面側より穿たれるが、穿 孔部破断面には煤が付着 しておらず、穿孔は使用 後になされたと考えられ る。18 は二重口縁形態 の甕。体部内面はナデ調 整が卓越する。大型高杯 32では、杯部へのミガ キ調整は認められず、脚 柱部と裾部の外面部の屈 曲は鈍いものとなってい る。小型丸底系の壺 25 ~ 27 も、甕同様にケズ リ調整やミガキ調整は大 きく後退する。これら資 料は上述した特徴より古 墳時代前期後葉、信里編 年古墳前期5~6期に位 置付けられると考える。

36・37 は 須 恵 器 杯 蓋で、37 は完形品である。37 の天井部内面には、同心円の当て具痕を認める。復元される口径等より、36 は TK23~TK47 型式併行期に、37は MT15~TK10 型 式併行期にそれぞれ位置付けられ、本資料が下層埋没の下限を示す。

**73・74** は、下縁に直 線状の刃部を有するサヌ カイト製のスクレイパー



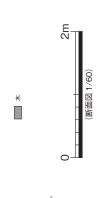
40

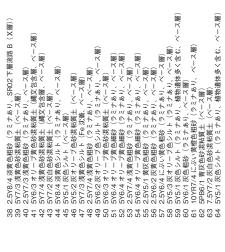
10.5m

10.5m

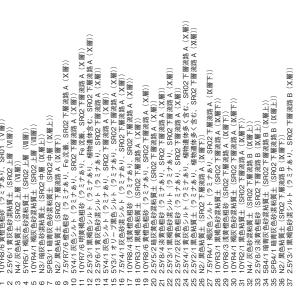
II区 SR02 土層断面図1

13 図











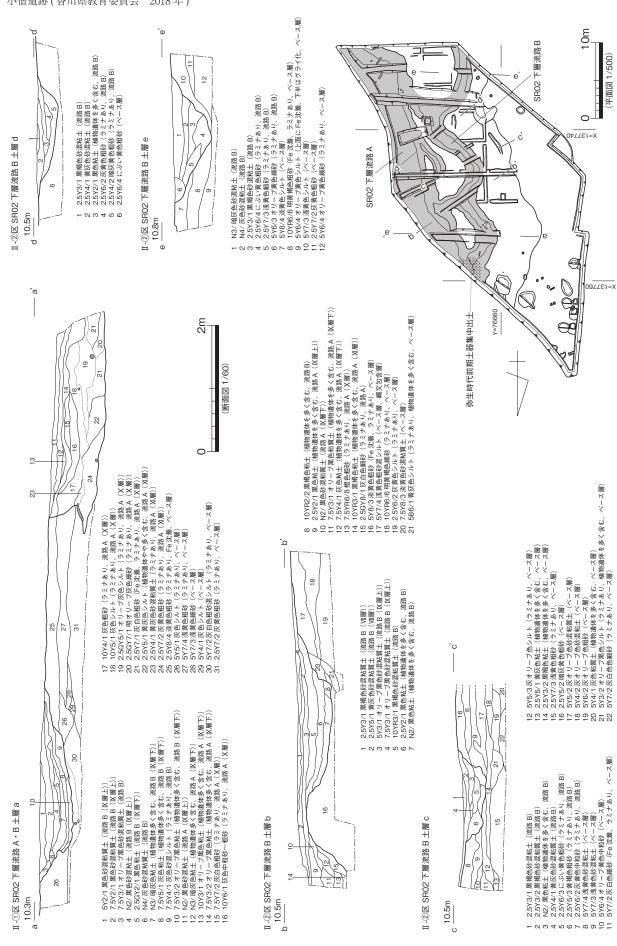












က

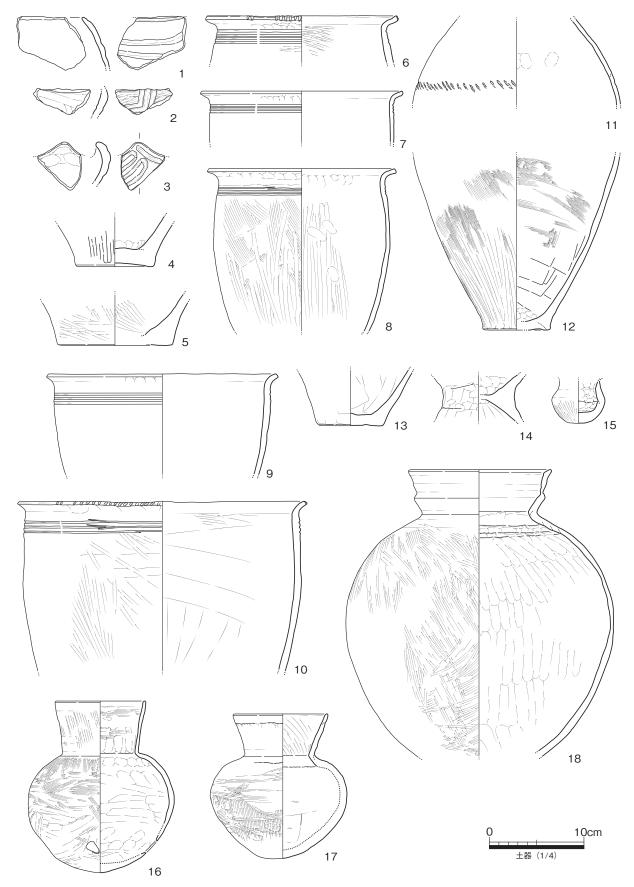
土層断面図

SR02 :

図

第 15 |

-22 -



第 16 図 I区 SR02 出土遺物実測図 1

として図示した。**73** は左図右側縁に、**74** は上縁にそれぞれ自然面を残す。**77** は、長さ 39.8cm以上、幅8.7cm、厚さ 2.6cmのクヌギ節の板目材を使用した板材である。表面は腐食が顕著なため、加工痕は認められない。上半部に、長さ 1.4cm、幅 0.8cmの矩形の孔を認める。腐食のため、人為的なものか断定は困難だが、枘穴として図示しておく。

6・8・19・38・40・42・76・78・79・92・94が中層出土の遺物である。6・8は弥生時代前期の甕で、下層からの混入資料であろう。19は古式土師器甕で、本資料も下層からの混入と考える。38は須恵器杯身。底部外面は回転ヘラ切りされ、TK217型式併行期前後に位置付けられる。40も同杯身。底部内面には黒色物が付着し、よく磨滅していることから、転用硯の可能性がある。42は須恵器短頸壺の体部小片で、最大径付近に沈線1条を施す。92は同杯蓋である。口縁部内面には重ね焼き痕を認める。94は同高杯脚部小片。3方向とみられる長方形透孔を穿つ。TK43~TK209型式併行期に位置付けられる。

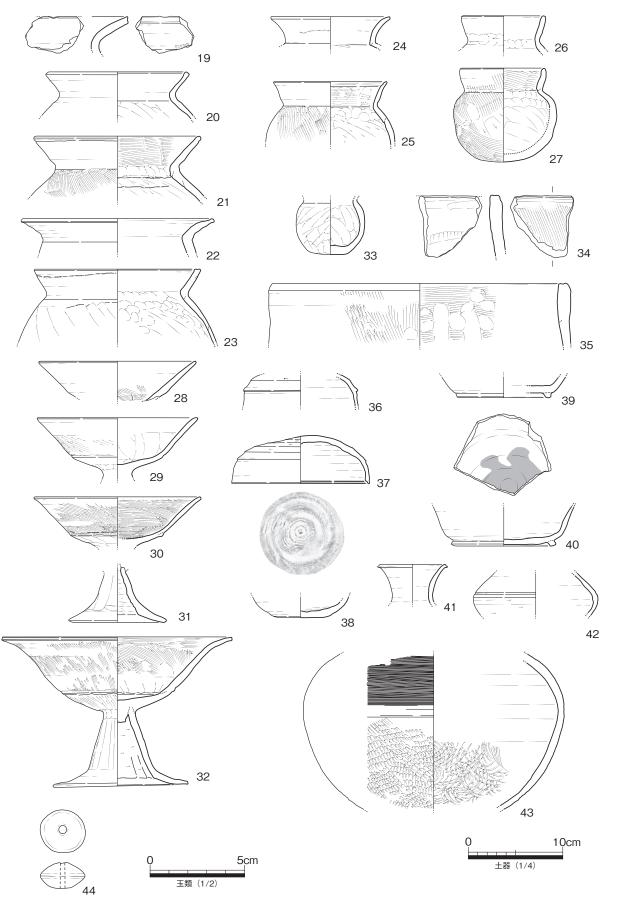
76 は、砂岩製の敲石で、図右面には敲打痕に切られる顕著な擦痕が認められる。砥石として利用していたものが破損等により、敲石に転用したと考えられ、表裏面と左側面に敲打痕を認める。78 は中層 3 出土の板材で、幅 5.1cm、厚さ 1.8cmのサワラの板目材を使用する。上下端は折損し、器表面は腐食のため加工痕は認めない。79 も同層出土の木杭で、径 2.2 ~ 3.3cmのやや扁平なアカガシ亜属の芯持ち枝材を使用する。下端は側面レ字状に斜めに切り落とし、尖らせる。

以上、中層出土資料は下層からの混入と考えられる資料を除けば、38・42・94の6世紀後半~7世紀中葉の資料を上限とし、40・92の8世紀後葉~9世紀前葉の資料を下限とする。資料数が限られ断定は困難だが、概ね出土資料の示す時期に埋没が進行したものと考えられる。上層出土資料との時期幅は短く、連続して埋没が進んだことが考えられる。

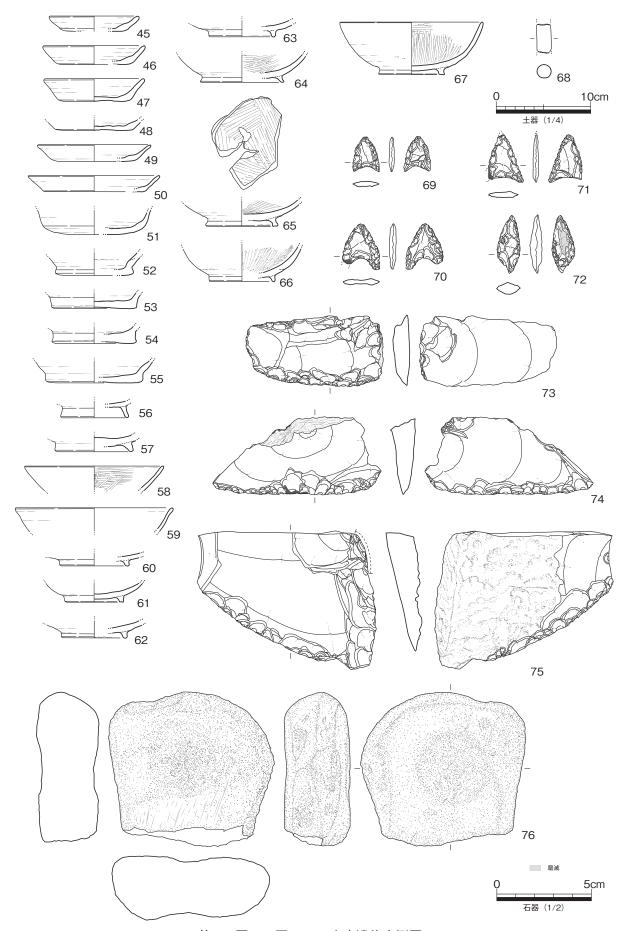
34・35・41・43・44・45~47・51~65・67・69~72・75・93・96~101が上層出土の遺物である。34・35は、移動式竈の掛口部の小片として図示した。35の内面には炭化物の付着痕が認められ、被熱により変色する。本来は、中層に帰属する資料と考えられる。41の須恵器広口壺や43の広口壺とみられる同壺体部片も、下層ないし中層からの混入と思われる。43の外面肩部にはカキ目を施し、体部下半は平行タタキを認める。TK23~TK47型式併行期を中心とした時期に位置付けられよう。44の算盤玉形土製品も、下層の古墳時代前期の古式土師器群に伴う資料と思われる。93は須恵器高杯として図化したが、小片のため他の器種となる可能性がある。杯部外面に、ヘラ描きの波状文で装飾する。

69~72·100·101 はサヌカイト製の打製石鏃。72 は、基部形状が不整形で、厚みがあること等より、 未成品か製作途中で破損して廃棄した可能性がある。なお、図右面には顕著な磨滅痕が認められ、打斧 等の転用品である可能性が高い。100 は、凸基式の大型打製石鏃である。長径2mm程度の粗粒の長石の 斑晶をやや多く含む。本資料も、表裏面中央部に顕著な磨滅痕を認め、打斧等の転用品の可能性が高い。 75 はサヌカイト製のスクレイパーで、図右面に自然面を残す。

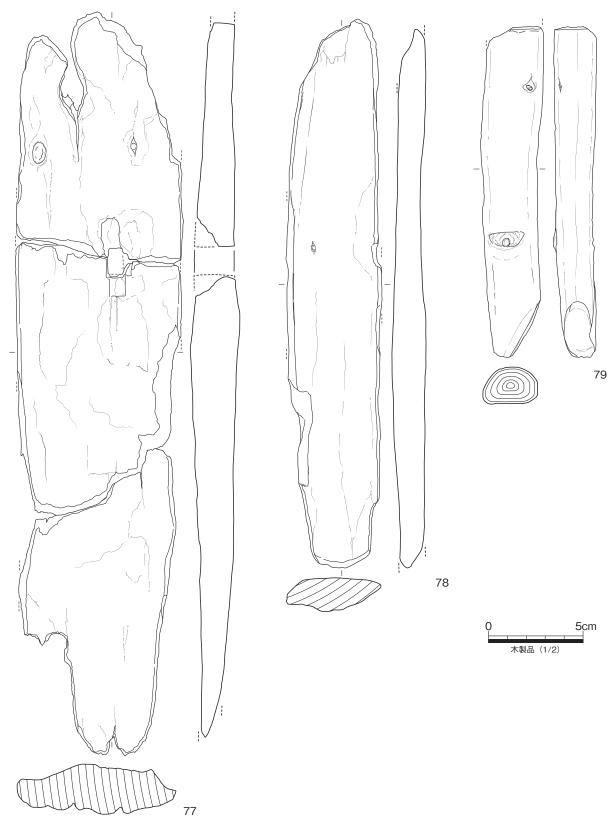
I 区を中心に出土した、土師質土器皿 45 ~ 47、同杯 51・96、同碗 52 ~ 57・97・98、黒色土器碗 58 ~ 67、十瓶山周辺窯産の須恵器碗 99 が、本層堆積時期を示す資料と考える。土師質土器皿 46 の外面は黒化しており、使用時に被熱した可能性がある。黒色土器碗内面のミガキは、放射状に施す 66・67 等と、格子状に施す 65 等の 2 者を認める。さて、これら資料の年代的位置付けだが、皿は口径 10 cm前後にまとまり、唯一完形に復元可能な黒色土器碗は径高指数 38 で、高台径 6.9cm、平高台碗は底部の立ち上がりが高く、これらの特徴から概ね 11 世紀後半代に位置付けられる資料と考える。 1 点のみ



第17図 I区 SR02 出土遺物実測図 2



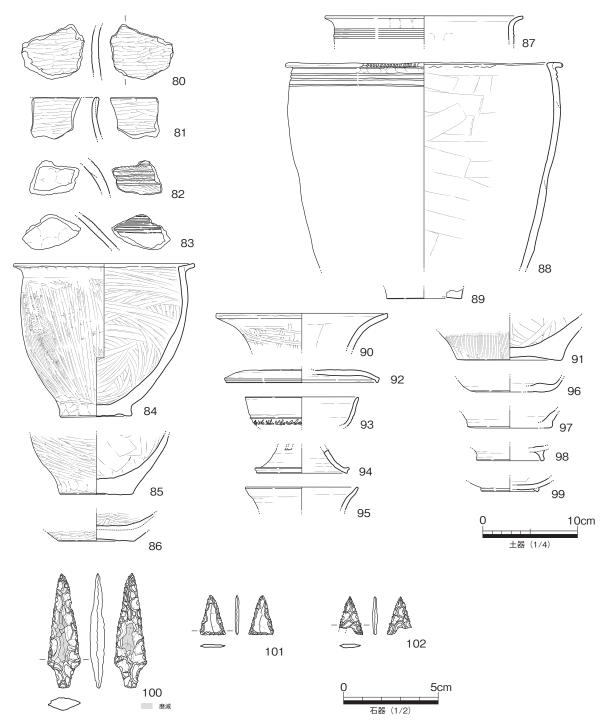
第18図 I区 SR02 出土遺物実測図3



第19回 I区SR02出土遺物実測図4

出土した須恵器碗は、13世紀前半代に位置付けられ、本層埋没の下限を示す資料であろう。

図示していないが、II区上層(VII層)からウシもしくはウマの歯牙片 1点が出土した。劣化が顕著なため、種名や部位を特定できなかった  $^{(\pm 1)}$ 。



第20図 Ⅱ区 SR02 出土遺物実測図

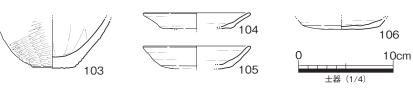
上記した以外の  $39\cdot 48\sim 50\cdot 66\cdot 68$  は、出土層位不明の遺物である。39 は須恵器杯身片。 $48\sim 50$  は土師器皿。66 は黒色土器碗。68 は棒状土錘とみられる径 1.5cm程度の円柱状の土器小片である。本調査区より出土した土錘は、本資料 1 点のみである。

#### 中世

#### 柱穴(第21図)

前節で既述したように、Ⅰ区第3遺構面、Ⅱ区第2遺構面で少数の柱穴群を検出した。いずれも建物遺

構を構成するものではないが、出土遺物や検出面より当該期の遺構であり、後述する土坑等も検出されていることから、小規模な屋敷地が調査



第 21 図 I 区柱穴出土遺物実測図

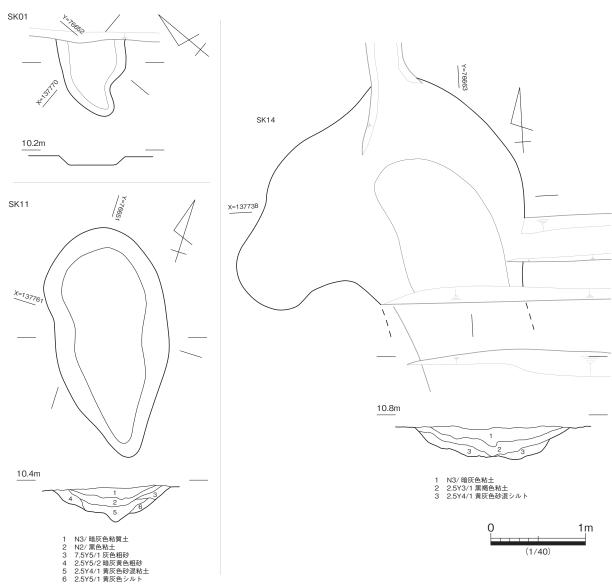
区周辺に展開する可能性を示唆するものと考える。以下、出土遺物についてのみ報告する。

**103** はⅡ区 SP15 出土の弥生土器甕底部片とした。外面には螺旋状のタタキ調整を施す。SR02 からの混入資料であろう。**104・105** は、Ⅰ区 SP09 出土の土師質土器皿。**106** は、Ⅰ区 SP05 出土の土師質土器皿底部片である。

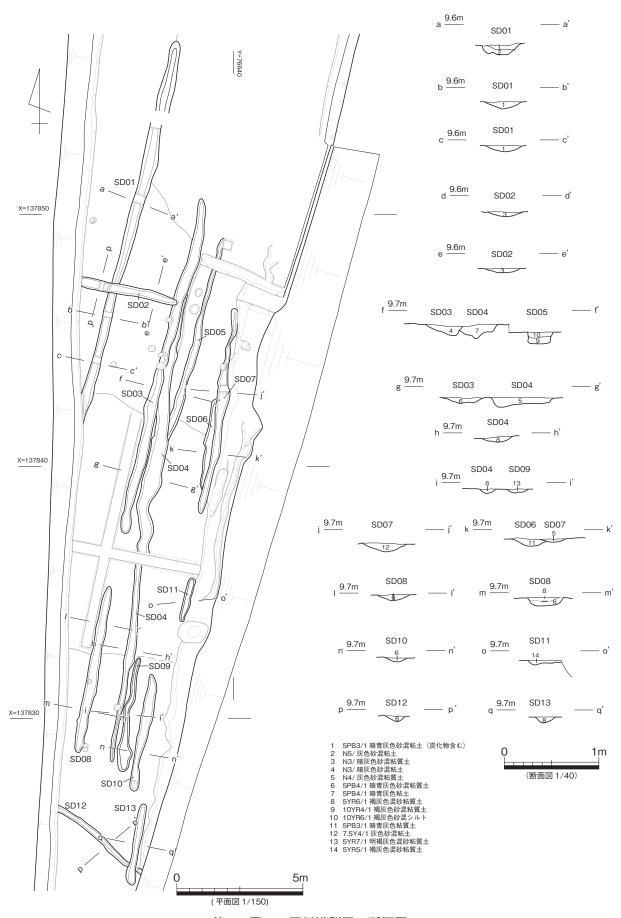
#### 土坑

#### SK01 (第22図)

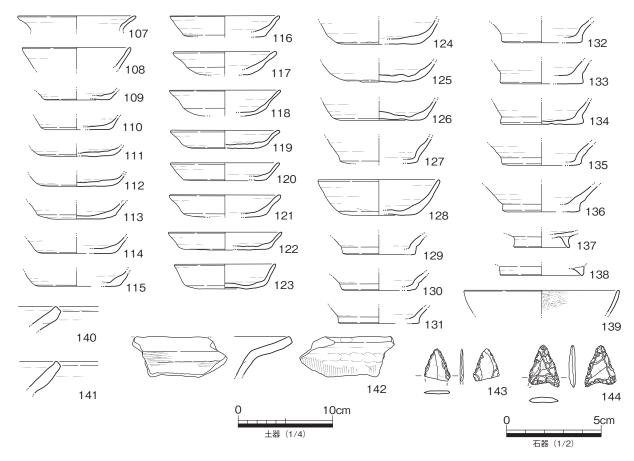
Ⅱ区北端第3遺構面 a、SR02上層下面で検出した土坑である。北半部は調査区外へ延長し、全形は



第 22 図 SK01・SK11・SK14 平・断面図



第23図 I区鋤溝群平·断面図



第24回 I区鋤溝群出土遺物実測図

不詳。長軸 0.81 m以上、短軸 0.73 m以上で、平面不定形を呈し、残存深は 0.09 mと浅い。埋土は、調査区壁面の記録より、暗青灰色粘質土の単層であった。

遺物は、弥生土器とみられる土器小片 2 点が出土したのみで、詳細な時期を特定することは困難だが、遺構上面を SR02 上層(第8図10層)が被覆することから、13世紀前半を下限とする近接した時期を想定する。

#### SK11 (第22図)

Ⅱ区北半部で検出した土坑である。長軸 2.44 m、短軸 2.10 mで、平面不整楕円形を呈する。残存深 0.38 mで、断面形は椀底状を呈する。埋土は 6 層に細分され、灰色系の粗砂や粘質土がレンズ状堆積する。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。近接して後述する近世土坑群が開削されているが、それらとは平・断面形状や埋土が大きく異なり、上述したSK01に近似することから、SK01と近接した時期の遺構の可能性を想定する。

#### SK14 (第22図)

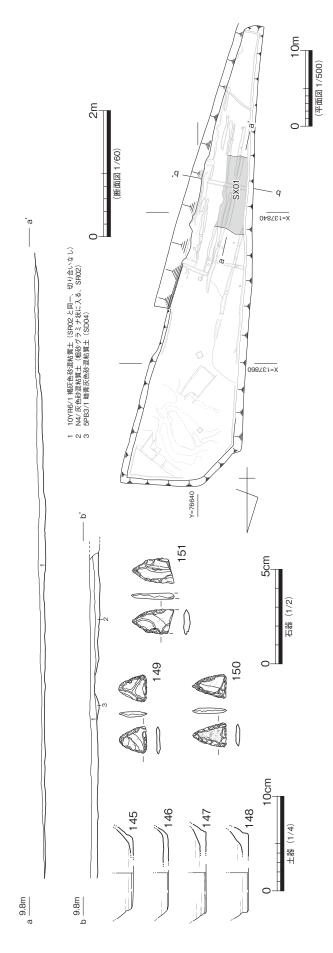
本土坑も、II 区南半第3遺構面 a、SR02上層下面で検出した土坑である。長軸 3.12 m、短軸 2.4 m 以上の平面不定形を呈し、記録位置で残存深 0.28 mの断面椀底状をなし、北半部では西側に緩やかに 掘り込まれたテラス面が付す。埋土は3層に細分され、暗色系の粘土・シルトがレンズ状に堆積する。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、上述した SK01 同様、遺構上面を

#### 鋤溝群 (第23・24図)

I 区南半部第3遺構面で、多条の並走す る溝群を検出した。東半の溝群はSR02上 面及びSX01下面より穿たれ、SX01より 先行しSR02中層より後出する。溝は、南 北溝を主体に東西溝2条を検出しており、 いずれも直線溝である。流路方向は、N 13~14°E前後のA群溝(SD01~SD03等) と、N 8.4° E 前後のB 群溝 (SD04・SD13 等)、N 51.04°WのSD12の3方向に大別 される。A群溝のSD01とSD03の芯々間 2.65 m、B 群溝の SD04 と SD13 の芯々間 は1.65 mをそれぞれ測る。SD12 を除いて、 検出面幅 0.15 ~ 0.75 m、残存深 0.03 ~ 0.22 m、断面形は概ね浅い皿状を呈して共通し、 埋土は灰色系砂混粘土~粘質土~シルトで あった。以上の内容から、これら溝群は畑 作等の耕作に伴う鋤溝と考えられ、流路方 向の相違等から、2回以上の耕起作業がな された可能性が考えられる。

遺物は、SD12を除く各溝より出土して いるものの、出土量はコンテナ2箱程度に とどまる。また、小片化したものが大半を 占め、器表面の磨滅等により調整不明なも のも多い。38点を図示した。図示した以 外に、器種不詳の弥生土器、サヌカイト剥 片等が少量出土している。土師質土器皿 107~123、同杯124~128、同碗129 ~ 138、黒色土器碗 139、土師器甕 140 ~ 142、打製石鏃 143・144 がある。土師質 土器皿・杯類の外底面は、確認できるもの はいずれも回転ヘラ切がなされている。上 述した溝の流路方向による細かな時期差 は、遺物からは判然としない。平高台碗の



断面・出土遺物実測図

· 計

SX01

× 25

揺

- 32 -

遺構名	平面形	断面形	i	計測値(m)		埋土	遺物	備考
週件石	十曲形	断曲加	長軸	短軸	残存深	4工	退彻	1用 专
SK02	不整隅丸方形?	箱形?	1.47	1.02 以上	0.26	2層、人為的埋め戻し	土器小片 1	SK03 より先行し、西半は調査区外へ延長
SK03	不整隅丸方形	箱形?	1.37	1.35	0.35	3層、人為的埋め戻し	なし	SK02 より後出する
SK04	不整隅丸方形?	逆台形?	1.58	1.11 以上	0.55	2層、人為的埋め戻し	なし	SK05・SK07より後出し、西半は調査区外へ延長
SK05	不整楕円形?	逆台形?	0.65	0.38 以上	0.41	不明	なし	SK04 より先行し、SK07 より後出する
SK06	不整楕円形?	逆台形?	1.44 以上	1.40	0.32	2層、人為的埋め戻し	銅銭1・金属器1	SK08 より先行する
SK07	不定形	箱形?	0.88 以上	1.44 以上	0.36	2層、人為的埋め戻し	なし	SK07 より後出する
SK08	不整隅丸方形	不明	2.21	2.05	0.67	4層以上、人為的埋め戻し	土師質土器杯等小片 10	北西方向に溝状の突出部あり
SK09	不明	皿状	1.17 以上	1.45 以上		2層、自然埋没?	なし	SK10より先行し、北半部は調査区外へ延長
SK10	不整隅丸方形	概逆台形	2.40	2.10	0.64	2層、人為的埋め戻し	なし	SK09 より後出する
SK12	不明	箱形?	1.27 以上	0.47 以上		1層?人為的埋め戻し	なし	SK13より先行し、西半は調査区外へ延長
SK13	不整隅丸方形	逆台形	1.34	1.26	0.5	5層、人為的埋め戻し	なし	SK12 より後出する

第1表 土坑属性一覧

形状や皿・杯類の規格、いわゆる十瓶山周辺窯産の須恵器碗が出土していないこと、SR02 上層との層位的関係等より、11 世紀後半~12 世紀代の時期幅の中に位置付けられるものと考える。

#### 性格不明遺構

#### SX01 (第25図)

I 区南半第3遺構面で検出した。SR02 西側に矩形に広がり、西端は調査区外へ延長する。東西3.0 m以上、南北9.44 m、残存深0.11 mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土はSR02 上層と同一層とみられる褐灰色粘質土が堆積する。

遺物は、少量の土師質土器皿の小片( $145 \sim 148$ )や打製石鏃( $149 \sim 151$ )等が出土したのみで、内容的には SR02 上層と大きな相違はみられない。以上の点から、人為的な遺構ではなく自然の浅い窪地であり、SR02 の最終埋没時に連続して埋没したものと考える。

#### 近世

#### 土坑 (第26・27図)

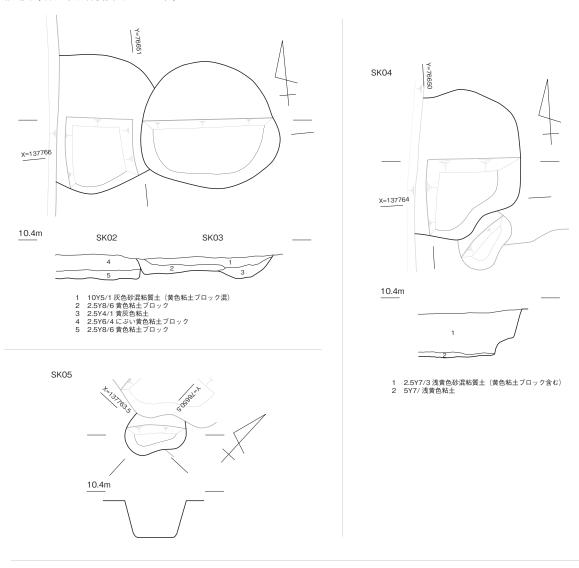
Ⅱ区北西隅部、第2遺構面で10基の土坑を検出した。数基の土坑で重複が認められ、検出した土坑数からも、土坑群の開削には一定の時間的な幅があった可能性が考えられる。各土坑についての細かな計測値や埋土の堆積状況は、図・表を参照されたい。

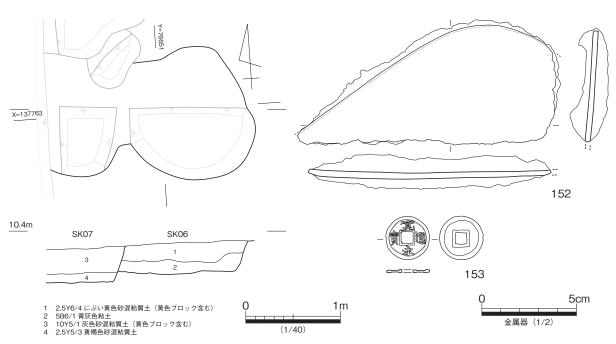
土坑は、長軸長約 $2.2 \sim 2.4$  mの大型の $SK08 \cdot SK10$  と、同約1.3 mの小型の $SK03 \cdot SK13$  等に二分される。SK09 は大半がSK10 と重複し、詳細は明らかにし難いが、断面形状や埋土等から、他の土坑群とは異なる性格の遺構である可能性も考えられる。大型土坑は東側に2 基が、小型土坑は西側に南北に列状に7 基がそれぞれ配される。埋土は、ブロック土を含む黄色系粘土が主として認められ、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、SK04 やSK08 等では、底面や埋土中位に、滞水下での堆積が想定される灰色系粘土が認められ、開削後埋没までの一定期間オープンな状態であった可能性が想定される。

遺物は、図示した以外には SK02 より器種不詳の土器小片 1 点と、SK08 より弥生土器と土師質土器 杯等の小片約 10 点がそれぞれ出土したのみである。152・153 は、いずれも SK06 出土の銅銭と不明の 鉄器片である。153 は 18 世紀代の新寛永銭であり、土坑群の時期を決定する唯一の資料であり、この 点は上述した検出面の層位的な関係からも矛盾はないものと考える。

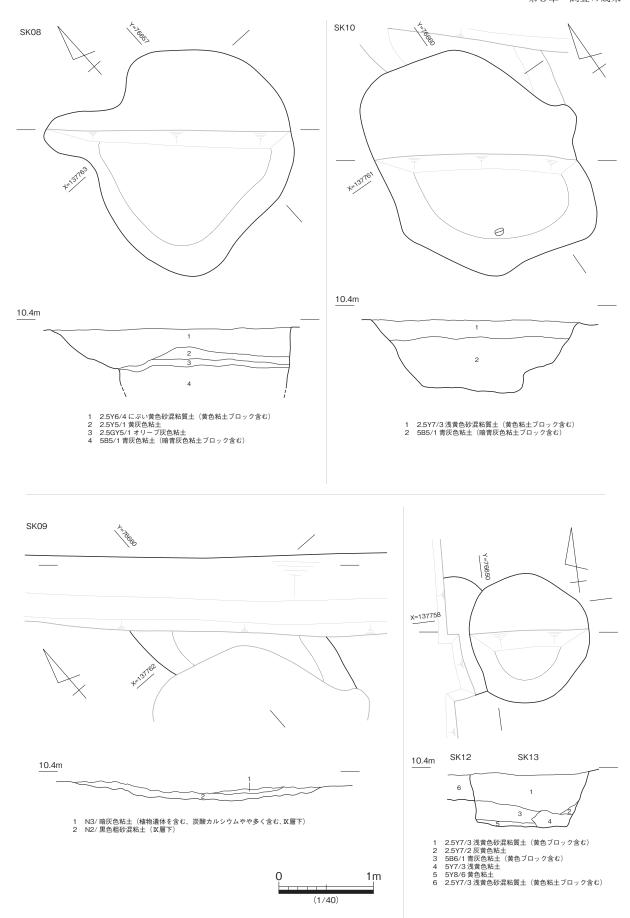
#### 自然河川

SR01 (第 28 ~ 30 図)

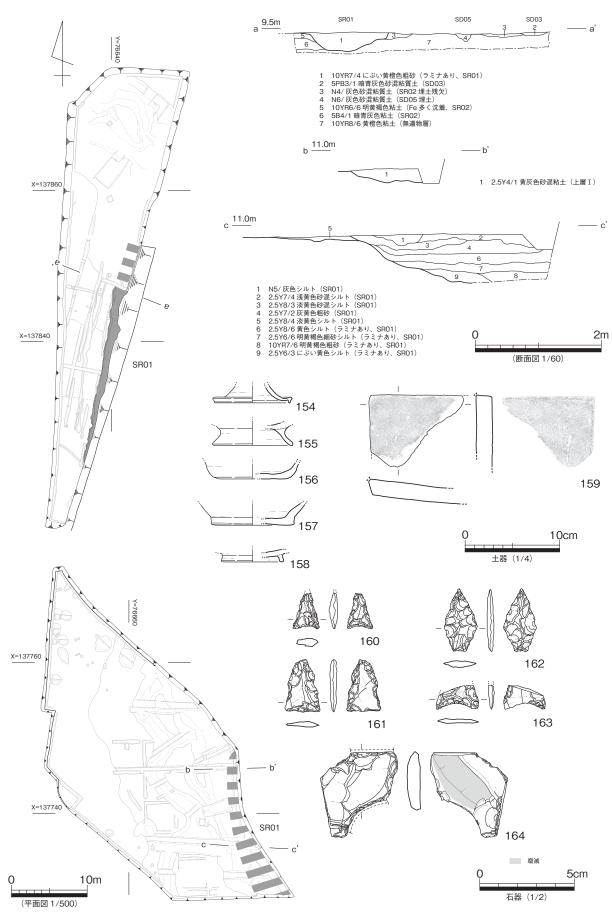




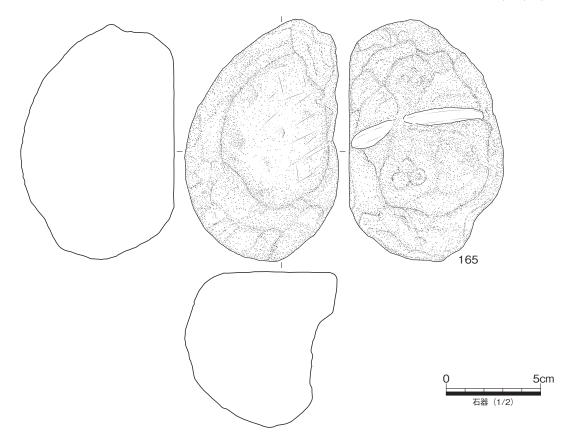
第26図 Ⅱ区 SK02 ~ SK07 平・断面・出土遺物実測図



第 27 図 II区 SK08 ~ SK10・SK12・SK13 平・断面図

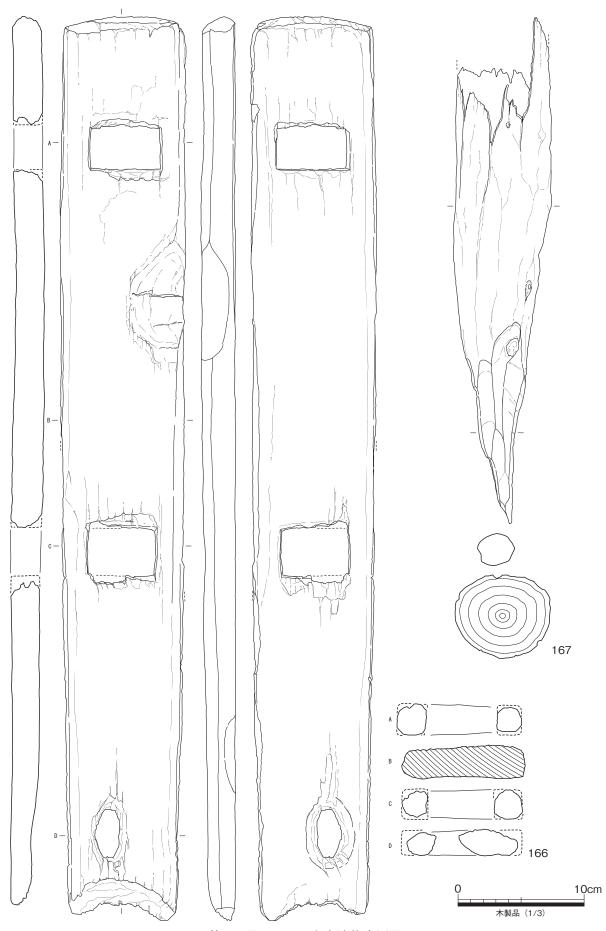


第28図 SR01 平・断面・出土遺物実測図1

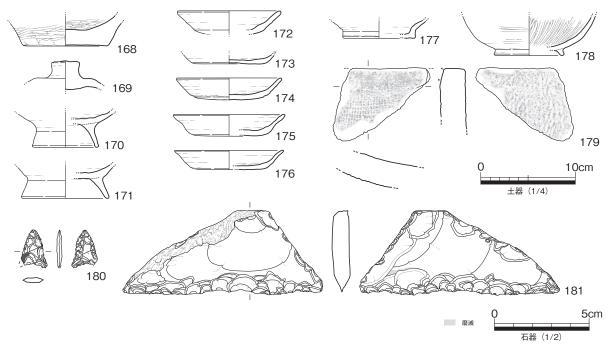


第29回 SR01 出土遺物実測図2

- I・Ⅱ区東端部で検出した自然河川で、いずれの調査区でも流路西岸を中心に検出され、流路本体の大半は調査区外となり、全形は不詳である。既述したSR02と重複し、SR02より後出する。
- I・Ⅱ区ともに遺物の出土量は乏しい。 I 区では弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器皿、黒色土器碗、平瓦片が、Ⅱ区では上層より弥生土器、土師質土器杯、肥前系染付皿が、下層より弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器杯・足釜、備前焼、丸瓦片が出土しており、いずれも SR02 からの混入資料が大半を占める。図示した遺物も、SR02 からの混入と考える資料が多く、中世後半期以降と考える燻平瓦 159 の小片のみ、本流路機能時に比較的近接する可能性がある。なお、埋没は図示していないが肥前系染付皿より、18 世紀後半以降と考える。
- 161 は平基式石鏃である。両側の押圧剥離は粗く、形態もやや不整形であり、未成品の可能性が高い。 163 は凹基式石鏃で、大きく半折する。また、図左面に一部擦痕を認め、打斧等の転用の可能性が考えられる。164 は、I 区砂層出土の楔形石器である。上・下縁に敲打による潰れが認められる。また、図右面には磨滅痕を認め、石庖丁等の転用の可能性がある。165 は、I 区上層より出土した細粒砂岩製の砥石。図左面を砥面として主に使用しているほか、図右面には幅 0.7cm程の溝に使用痕が残される。
- 166 は、建築部材とみられる加工木である。表面は炭化して木目が浮き出ており、加工痕は不明である。長さ71.7cm以上、幅9.9cm、厚さ2.7cmのスギの板目材を使用し、下端は欠損する。上端より約9cm下方に幅5.2~5.4cm、長さ3.1~3.7cmの矩形の穿孔を、芯々間で約33cm離れて2孔穿つ。さらに幅1.9cm、長さ3.8cmの不整楕円形の孔を認めるが、これは人為的に穿孔されたものかは不明である。167は、径8cm程度のアスナロの丸太材を利用した木杭である。表面は腐食が顕著で加工痕は不明瞭ながら、下端を多角形状に削り尖らせる。



第30図 SR01 出土遺物実測図3



第31 図 包含層等出土遺物実測図

#### 遺構外出土の遺物 (第31図)

以下では、遺構検出時もしくは側溝等掘り下げ時に出土するなどして、帰属遺構が不詳な遺物について報告する。169 は土師器蓋として図示したが、別の器形となる可能性もある。頂部に径3cm程度の円柱状の摘みを付す。170・171 は脚台付の土師器皿もしくは杯である。172~173 は土師質土器皿、177 は同碗である。178 は黒色土器碗で、内面には放射状のミガキが施される。これらの資料は、I区遺構検出時に出土したものが多く、SR02 上層を中心とする資料と考えられる。179 は、凸面に縄目タタキを施す布目平瓦の小片で、古代の資料である。181 は、前節で既述したように、SR02 のベースとなる縄文時代の流路より出土した可能性のあるスクレイパーで、直線状の刃部を有し、背部に自然面を残す。

#### 補註

1 動物遺体の同定には、広島大学総合博物館 石丸恵理子氏のご教示を得た。なお、Ⅱ②区からは詳細な出土位置は不明ながら、ウシの上顎臼歯片1点が出土している。

#### 第4章 自然科学的分析の成果

#### 第1節 樹種同定

株式会社イビソク

#### 1. はじめに

古川中流域の沖積平野に立地する小僧遺跡から出土した木材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

#### 2. 試料と方法

試料は、自然流路 SR02 の下位流路 A および B から各 1 点、SR02 から 7 点、SR01 畔以西から 2 点、 北側トレンチ西半から 1 点採取された、計 12 点の生の木材である。木取りが確認可能な試料について は、切片採取前に木取りの確認を行った。樹種 06 は縄文時代、樹種 07、08 は弥生時代中期、樹種 01、 03 ~ 05、09 ~ 11 は弥生時代後期~古墳時代前期、樹種  $02\cdot12$  は近世の木材と考えられている。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

#### 3. 結果

同定の結果、針葉樹であるモミ属とマツ属複維管東亜属、スギ、サワラ、アスナロの5分類群と、広葉樹であるクスノキとコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属と呼ぶ)、コナラ属クヌギ節(以下、クヌギ節と呼ぶ)、ヌルデの4分類群の、計9分類群がみられた(以下分析は、株式会社パレオ・

	時期	弥生時代中期		代後期~ F代前期	近七	<u>t</u>	合計
樹種	器種	自然木	板材	自然木	建築部材?	木杭	-
モミ属		1					1
マツ属複維管束	臣属			2			2
スギ					1		1
サワラ			1				1
アスナロ						1	1
クスノキ				1			1
コナラ属アカガ	シ亜属		1	1			2
コナラ属クヌギ質	ĥ		1	1			2
ヌルデ		1					1
	合計	2	3	5	1	1	12

第2表 出土木製品の樹種同定結果

ラボ 小林克也氏の協力を得た)。マツ属複維管東亜属とアカガシ亜属、クヌギ節は各2点であったが、 それ以外の樹種はいずれも1点ずつであった。同定結果を第2表に、一覧を第3表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

#### (1) モミ属 Abies マツ科 図版1 1a-1c(樹種08)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。 放射組織は単列で、高さ1~8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~4個みられる。ま た放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複維管東亜属 Pinus subgen. Diploxylon マツ科 図版 1 3a-3c( 樹種 10)、4a-4c( 樹種 01) 仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(3) スギ Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don ヒノキ科 図版 1 4a-4c( 樹種 12)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(4) サワラ Chamaecyparis pisifera (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版 1 5a-5c( 樹種 03)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、 $1\sim6$ 細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(5) アスナロ Thujopsis dolabrata (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図版 1、2 6a-6c( 樹種 02)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ  $2\sim13$  列となる。分野壁孔は小型のヒノキ~スギ型で、1 分野に  $2\sim4$  個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は 比較的容易である。また精油分が多く、耐朽性に優れている。

(6) クスノキ Cinnamomum camphora (L.) J.Presl クスノキ科 図版 2 7a-7c( 樹種 06)

中型の道管が単独ないし $2\sim3$  個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1分野に2個みられる。また、放射組織や木部繊維には油細胞がみられる。

クスノキは暖帯から亜熱帯へかけての本州中南部、四国、九州に分布する常緑高木の広葉樹である。 材はやや軽軟なものから中庸なものまであり、切削加工は容易である。また、耐朽性および耐虫性がき わめて高い。

(7) コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科 図版 2 8a-8c( 樹種 04) 厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。 したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加 小僧遺跡(香川県教育委員会 2018年)

工は困難である。

(8) コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科 図版 2 9a-9c( 樹種 09)

年輪のはじめに大型の道管が $1\sim3$ 列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(9) ヌルデ Rhus javanica L. var. chinensis (Mill.) T.Yamaz. ウルシ科 図版 2 10a-10c( 樹種 07)

年輪の始めに大型の道管が1列並び、徐々に径を減じた道管が晩材部では多数複合して接線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、幅1~4列となる。

ヌルデは石狩平野以南の北海道、本州、四国、九州の陽性の二次林に多く分布する落葉小高木の広葉 樹である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、耐朽性が高い。

#### 4. 考察

弥生時代中期の自然木は、モミ属とヌルデであった。モミ属とヌルデは、ともに遺跡周辺にも生育可能な樹種であり(伊東ほか、2011)、遺跡周辺に生育していたと考えられる。

弥生時代後期~古墳時代前期の板材はサワラとクヌギ節、木杭はアカガシ亜属であった。サワラは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い樹種で、アカガシ亜属とクヌギ節は堅硬な樹種である(伊東ほか、2011)。一方、自然木はマツ属複維管束亜属とクスノキ、アカガシ亜属、クヌギ節であった。いずれも遺跡周辺にも生育可能な樹種であり(伊東ほか、2011)、遺跡周辺に生育していたと考えられる。近世の建築部材とみられる材はスギ、木杭はアスナロであった。スギとアスナロは、真っ直ぐで加工

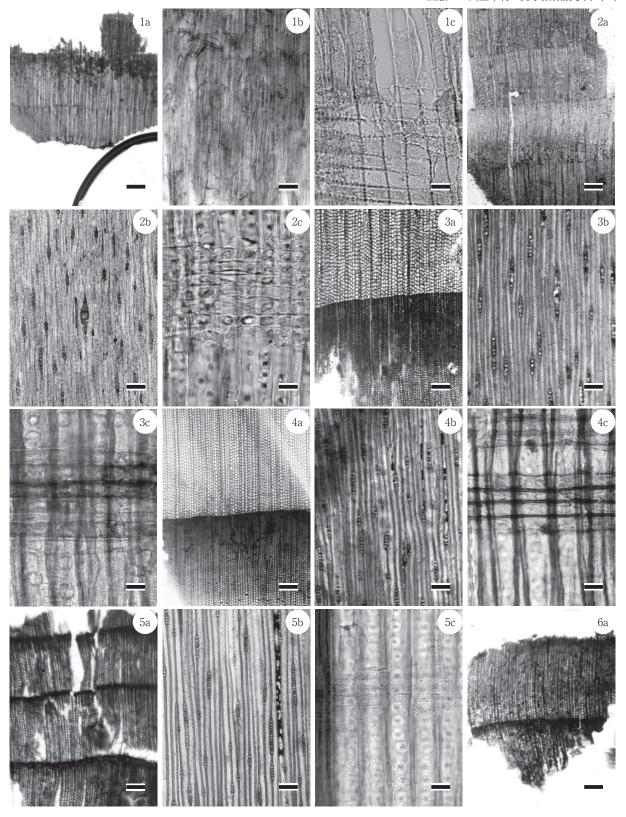
#### 引用文献

性が良い樹種である (伊東ほか, 2011)。

伊東隆夫·佐野雄三·安部 久·内海泰弘·山口和穂(2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社,

試料番号	管理番号	遺物番号	地区	遺構	層位	器種等	樹種	木取り	推定時期	年代測定番号
樹種 01	KKZ-R0226	不掲載	I -①区	SR02	上層	自然木	マツ属複維管束亜属	不明	弥生後期~古墳前期	
樹種 02	KKZ-R0224	167	I -①区	SR01 畦以西	下層	木杭	アスナロ	芯持丸木	近世	
樹種 03	KKZ-R0227	78	I - ①区	SR02	中層 3	板材	サワラ	追柾目	弥生後期~古墳前期	
樹種 04	KKZ-R0233	79	I -①区	SR02	中層 3	木杭	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	弥生後期~古墳前期	
樹種 05	KKZ-0055	不掲載	II - ②区	SR02 北壁		自然木	コナラ属アカガシ亜属	不明	弥生後期~古墳前期	PLD-34465
樹種 06	KKZ-0054	不掲載	I - ②区	北側トレンチ西半		自然木	クスノキ	不明	縄文時代	PLD-34466
樹種 07	KKZ-R0229	不掲載	II - ②区	A3SR02 下位流路 A	11 層	自然木	ヌルデ	不明	弥生中期	
樹種 08	KKZ-R0230	不掲載	II - ②区	C2SR02 下位流路 B	11 層	自然木	モミ属	不明	弥生中期	
樹種 09	KKZ-R0225	不掲載	II - ②区	A3SR02	VII層	自然木	コナラ属クヌギ節	不明	弥生後期~古墳前期	
樹種 10	KKZ-R0226	不掲載	I - ①区	SR02	上層	自然木	マツ属複維管束亜属	不明	弥生後期~古墳前期	
樹種 11	KKZ-R0228	77	I - ①区	SR02	下層	板材	コナラ属クヌギ節	柾目	弥生後期~古墳前期	
樹種 12	KKZ-R0224	166	I - ①区	SR01 畦以西	下層	建築部材?	スギ	追柾目	近世	

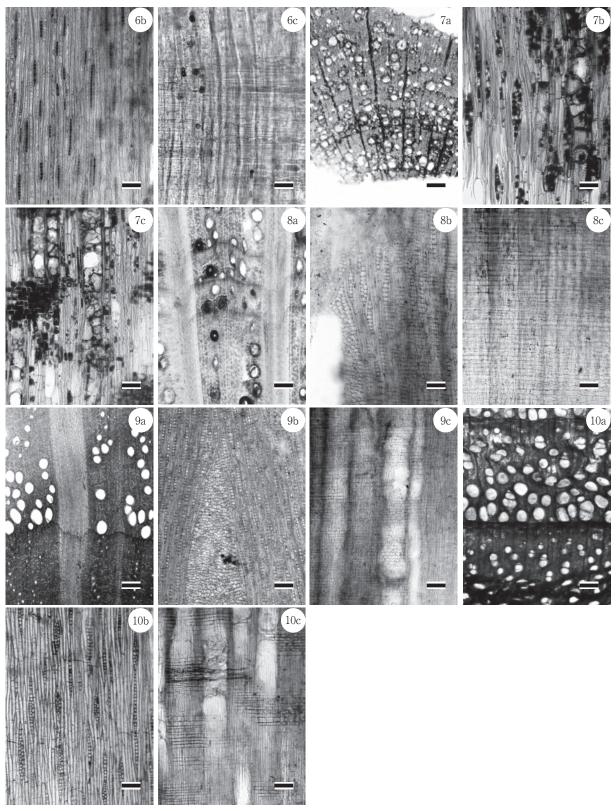
第3表 出土木製品の樹種同定結果一覧



la-lc. モミ属 ( 樹種 08)、2a-2c. マツ属複維管束亜属 ( 樹種 10)、3a-3c. マツ属複維管束亜属 ( 樹種 01)、4a-4c. スギ ( 樹種 12)、5a-5c. サワラ ( 樹種 03)、6a. アスナロ ( 樹種 02)

a: 横断面 (スケール =250  $\mu$ m)、b: 接線断面 (スケール =100  $\mu$ m)、c: 放射断面 (スケール =25  $\mu$ m)

図版2 出土木材の光学顕微鏡写真(2)



6b-6c. アスナロ (樹種 02)、7a-7c. クスノキ (樹種 06)、8a-8c. コナラ属アカガシ亜属 (樹種 04)、9a-9c. コナラ属クヌギ節 (樹種 09)、10a-10c. ヌルデ (樹種 07)

a: 横断面 (スケール =250  $\mu$ m)、b: 接線断面 (スケール =100  $\mu$ m)、c: 放射断面 (スケール =6:25  $\mu$ m・7-10:100  $\mu$ m)

#### 第2節 放射性炭素年代測定

株式会社 イビソク

#### 1. はじめに

香川県東かがわ市の小僧遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料について樹種同定が行われている(樹種同定の項参照)。

#### 2. 試料と方法

試料はII-②区 SR02 から出土した生材 (試料 No. 年代 04: PLD-34665)、I-②区北側トレンチ西半から出土した生材 (試料 No. 年代 05: PLD-34666) である。試料 No. 年代 04、05 の生材は最終形成年輪が残っており、発掘調査所見では 04 は弥生時代後期~古墳時代前期頃、05 は縄文時代と考えられている。測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである(以下分析は、株式会社パレオ・ラボー伊藤茂氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomtatidze 氏・小林克也氏の協力を得た)。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。 得られた  $^{14}$ C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}$ C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34665	試料 No. 年代 04 適跡名: 小僧遺跡 管理番号: KKZ-0055 調構: SR02 層位: 北壁	器種:自然木	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-34666	試料 No. 年代 05 遺跡名: 小僧遺跡 管理番号: KKZ-0054 調査区: 1・②区 位置: 北側トレンチ西半	器種:自然木	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

第4表 測定試料および処理

#### 3. 結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta$  <sup>13</sup>C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した <sup>14</sup>C 年代、暦年較正結果を、第32 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

 $^{14}$ C 年代は AD1,950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}$ C 年代(yrBP)の算出には、 $^{14}$ C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した  $^{14}$ C 年代誤差( $\pm$  1  $\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}$ C 年代がその  $^{14}$ C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の <sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された <sup>14</sup>C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の <sup>14</sup>C 濃度の変動、および半減期の違い (<sup>14</sup>C の半減期 5,730

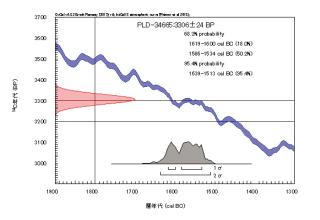
小僧遺跡(香川県教育委員会 2018年)

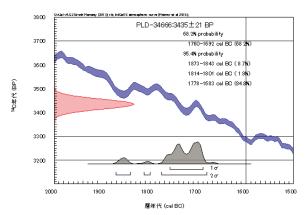
±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

 $^{14}$ C 年代の暦年較正には OxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1  $\sigma$ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  $^{14}$ C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2  $\sigma$ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}$ C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	δ <sup>13</sup> C	曆年較正用年代	<sup>14</sup> C 年代	<sup>14</sup> C 年代を暦年代に	較正した年代範囲
例此留与	(‰)	(yrBP $\pm 1 \sigma$ )	(yrBP $\pm 1 \sigma$ )	1 σ暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-34665 試料 No. 年代 04 小僧遺跡	-27.23 ± 0.28	3306 ± 24	3305 ± 25	1619-1600 cal BC (18.0%) 1586-1534 cal BC (50.2%)	1639-1513 cal BC (95.4%)
PLD-34666 試料 No. 年代 05 小僧遺跡	-26.37 ± 0.19	3435 ± 21	3435 ± 20	1760-1692 cal BC (68.2%)	1873-1843 cal BC ( 8.7%) 1814-1801 cal BC ( 1.9%) 1778-1683 cal BC (84.8%)

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果





第32図 暦年較正結果

#### 4. 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲(確率 95.4%)に着目して結果を整理する。なお、土器形式と暦年代の対応関係については、小林(2008)、工藤(2012)、岡田(2008)を参照した。

II - ②区 SR02 から出土した試料 No. 年代 04(PLD-34665)は、 $^{14}$ C 年代が 3,305 ± 25 14C BP、2  $\sigma$  暦年代範囲が 1,639-1513 cal BC (95.4%) であった。また I - ②区北側トレンチ西半から出土した試料 No. 年代 05(PLD-34666)は、 $^{14}$ C 年代が 3,435 ± 20 14C BP、2  $\sigma$  暦年代範囲が 1,873-1843 cal BC (8.7%)、1,814-1801 cal BC (1.9%)、1,778-1683 cal BC (84.8%) であった。これらは、縄文時代後期後半に相当する。試料は生材で、最終形成年輪が残っていた。そのため、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。なお、発掘調査所見では、試料 No. 年代 04 は弥生時代後期~古墳時代前期と考えられていたが、測定結果ではそれよりも古い値を示した。一方、試料 No. 年代 05 は縄文時代とされており、分析結果と整合的である。試料 No. 年代 04 は、遺構内に古い時代の自然木が再堆積した可能性がある。

#### 参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のもの さしし: 257-269 同成社

工藤雄一郎(2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史―高精度放射性炭素年代測定と考古学―. 373p, 神泉社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C 年代編集委員会編「日本先史時代の14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会

岡田憲一(2008)四線文系土器(宮滝式・元住吉山耳式土器). 小林達雄編「総覧縄文土器」: 650-657, アム・プロモーション. Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCall3 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

#### 第5章 まとめ

#### 第1節 遺構の変遷

#### 縄文時代

第3遺構面のベースとなる灰色ないし黄色系粗砂・粘土層より、サヌカイト製のスクレイパー1点が出土した。そのほか調査記録には同層中より縄文土器の出土が記載されているが、遺物は残されていない。また、後述する弥生時代の自然河川 SR02より、縄文時代後期の土器片が混入資料として出土している。これらの調査成果より同層は、当該期に流下した旧古川の自然河川の堆積層であった可能性が考えられる。河川堆積層は、調査区ほぼ全面に及んでおり、比較的規模の大きな河川であったとみられる。本河川堆積層と SR02より出土した自然木各1点について、放射性炭素年代測定を実施した。分析結果は前章に既述したように、いずれも縄文時代後期後半の年代が提示され、理化学的な分析からも、自然河川が当該期に流下していたことが傍証された。なお、SR02出土試料は、縄文時代流路からの混入と考えられる。

当該期の自然河川は、近接する原間遺跡 SRB07(香川県教育委員会 2005)や、仲戸遺跡 SR01・02(香川県教育委員会 2016)等で確認されている。周辺地域で、残念ながら建物等の遺構は現在までに確認されていないが、これら遺跡の近接地に集落が営まれていた可能性は高いと考えられる。

#### 弥生時代~古墳時代

当該期の遺構は、第3遺構面で検出した SR02 がある。調査地周辺は、本期に至っても自然河川の流路域として、諸開発行為からは取り残されていたようだ。出土遺物は、弥生時代前期後葉、同中期後葉、古墳時代前期前葉、同後期の資料が出土しており、とくに弥生時代前期後葉と古墳時代前期前葉には、完形に近く復元可能な資料がまとまって出土しており、近接地に当該期の集落等が所在した可能性が想定される。また、後者の古墳時代前期前葉の資料は、遺跡東側の丘陵上に所在する全長約38mの前期前方後円墳である大日山古墳(1号墳)と時期的に近接する資料であり、同古墳の築造集団の所在を考察する上で、重要な資料となるものと考えられる。

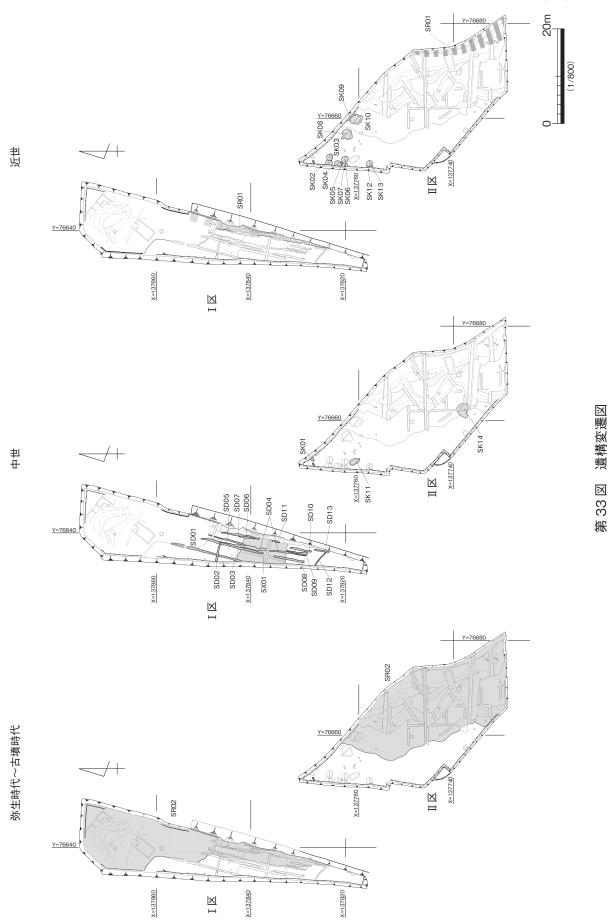
なお、SR02より出土した板材等の加工木3点と自然木6点について、樹種同定分析を実施した。分析数が限られるため断定は困難だが、一部に針葉樹の二次林が広がることが予想されるものの、広葉樹も一定数出土しており、多様な植生の森林が生育していた可能性が考えられる。今回は、花粉分析等が実施できなかったが、今後の調査で分析がなされれば、より詳細な森林植生や開発についての資料が得られるものと考える。

#### 古代

当該期の遺構は確認されていない。上述したSR02上層を中心に、少量の遺物が出土している。注目される遺物として、転用硯の可能性が考えられる須恵器杯がある。

#### 中世

第3遺構面で検出したⅠ区鋤溝群と、第2遺構面で検出したⅠ区水田面と柱穴、Ⅱ区土坑等が当該期



小僧遺跡(香川県教育委員会 2018年)

の遺構と位置付けられる。既述した自然河川 SR02 の上層より、11 世紀後半~13 世紀前半代を下限とする遺物が出土しており、ほぼ当該期には自然河川の埋没が完了し、平準化されたと考えられる。

I 区鋤溝群から出土した遺物は、SR02 上層出土資料とほぼ同時期であり、SR02 埋没後に調査区周辺が耕地化されたことを示している。柱穴や土坑は、出土遺物がほぼ皆無に近く、屋敷地等の居住域ではなく、こうした耕地に係る遺構と考えられる。鋤溝群の上位には水田面が開かれており、残念ながら水田耕土層等からの遺物が出土しておらず、時期を特定できないものの、13世紀以降耕地として一定期間利用された可能性が考えられる。

#### 近世

Ⅱ区第2遺構面で検出した土坑群と、第1遺構面の自然河川 SR01 及び旧耕土層群が当該期に位置付けられる。調査区周辺は、本期にも居住遺構は検出されず、依然として耕地として利用されたと考えられる。自然河川 SR01 は、古川の旧流路であり、その西岸付近を検出した。

#### 報告書

香川県教育委員会 2005 『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原間遺跡』 香川県教育委員会 2016 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 仲戸遺跡・仲戸東遺跡』

		100	/# BB	羅鱧	教训	色調	Í		胎土	,,,		41 43	thm	計測値 (cm)	n)	1	- HP
番号 番号	号 增化	55個	部形	外面	内面	外面	-	石英·長石	角閃石	登台	結晶片岩	щ	口径 器	器高 底径	径 その他	他 残年	佣名
1 SR02	-	縄文土器	浅鉢		m	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	中・多				かや軟	H			1/8 未満	
2 SR02	12 下層	縄文土器	紫軟	体部:ミガキ後沈線	体部:ナデ	25Y7/3 浅黄 2	25Y6/3 にぶい黄	粗·莱				良好				1/8 未満	
3 SR02	2 下層	縄文土器	紫鉄		マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙 2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	祖· 中				やや軟				1/8 未満	
4 SR02	1 2	弥生土器	榈	体部:ミガキ・マメツ、底部:マ / メツ	体~底部:指オサエ・ナデ?マメ ツ	10YR6/3 にぶい黄橙 7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	· · 参				良好			(8.0)	8/9	
5 SR02	28 平層	弥生土器	御	体部:ミガキ?マメツ、底部:マ メツ	体~底部:ハケ・マメツ	7.5YR8/3 浅黄橙 2	25Y7/1灰白	± ₩				良好		1)	(121)	2/8	
6 SR02	2 中層工	弥生土器	編	口線: ヨコナデ・指オサエ・端部 に刻み目、体部: 板ナデ? ヘラ描 き沈線4条	口縁:ヨコナデ、体部:ミガキ・    マメツ	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	<b>刹</b> 中				良好	(20.0)			1/8未満	
7 SR02	2 下層	弥生土器	崇	口縁:指オサエ?マメツ、体部: 口線: 指オサエ?マメッ、体部: 口マメッ・梅描き沈線3条	口縁~体部:マメツ	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/3にぶい黄橙	± %				やや軟	(21.2)			1/8	外面媒付着
8 SR02	2 中層正	弥生土器	影	口線:指オサエ・ヨコナデ、体部: ハケ・ミガキ後三条ヘラ描き沈線・ マメッ	口縁:ヨコナデ、体部:ミガキ後、 ナデ・マメツ	10YR4/2 灰黄褐 1	10YR4/1 褐灰	掛・中				良好	(19.6)			1/8	体部外面媒付着
9 SR02	2 下層	弥生土器	崇	口線:指オサエ?マメツ、体部: 梅描き沈線3条・マメツ	口縁~体部:マメツ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	⊕				良好	(24.0)			1/8	
10 SR02	2 下層	弥生土器	影	口線:指オサエ・ヨコナデ・端部 刻み目、体部:3条ヘラ描き沈線・ 板ナデ?ミガキ・マメツ	口縁:マメツ、体部ハケ・板ナデ? マメツ	10YR7/4 にぷい黄橙 7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	⊕ %				良好	(30.0)			1/8 未謝	体部下半外面媒付着
11 SR02	2 下層	弥生土器	崇	体部:刺突文・マメツ	マメツ	10YR7/4にぶい黄橙 2	2.5Y8/2 灰白	中・小				かや軟				1/8 未満	
12 SR02	2 下層	弥生土器	影	体部:ハケ後ミガキ、底部:ナデ? サエ・ナデ	デ、底部:指オ	10YR7/2 にぷい黄橙 10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	⊕ ••				良好		5	(0.7)	3/8	体部内面炭化物付着
13 SR02	2 下層	弥生土器	影	体部:板ナデ?マメツ、底部:ナ デ?マメッ	体~底部:板ナデ?マメツ	7.5YR5/2 灰褐	10YR5/2 灰黄褐	⊕ %				やや軟			(9.6)	8/8	
14 SR02	2 下層	弥生土器	台付選	体~脚台:指オサエ・ナデ	体部:ケズリ?後指オサエ・ナデ、 脚台:ナデ	25Y7/3浅黄 2	2.5Y7/3 浅黄	粗·多				良好				3/8	
15 SR02	2 下層	弥生土器	ミニチュア土	体∼底部:ハケ後ナデ?マメツ		25Y7/2灰黄	2.5Y6/2 灰黄	湖・中				良好			体部 径 5.5	部 8/8	
16 SR02	2 下層	古式上節器	増口車	口線:タテハケ後ヨコナデ、体~ 底部:ハケ後ナデ	口縁:指オサエ・ナデ後一部ハケ、 体~底部:指オサエ・ナデ	10YR6/3にぶい黄橙 1	10YR5/3にぶい黄橙	ф· ф				良好	(6.3)	18.1		4/8	体部外面媒付着、焼成 後穿孔
17 SR02	2 下層	古式上節器	超回型	<ul><li>口線:ヨコナデ、体~底部:ハケ後ナデ</li></ul>	口線:ハケ後ョコナデ、体~底部: ケズリ	5Y5/1 胚 2	2.5Y8/2 灰白	÷.				良好	(6.9)	15.3		8/2	体部外面媒付着
18 SR02	2 下層	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	影	□線~類部:∃コナデ、体部:ハ □線~類部:∃コ ケ 部:指オサエ・ナ	ナデ・ナデ、体 デ	10YR7/2にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	選 ※		場・課		良好	(14.8)			4/8	
19 SR02	日屋山 2	古大士師器	影	口縁~頸部:ヨコナデ	口縁: ヨコナデ、頸部: ハケ後ョ コナデ	10YR8/3 浅黄橙 1	10YR8/3浅黄橙	⊕ %				良好				1/8 未端	
П	-	古式土師器 選	影		-	2.5Y7/2 灰黄 2	2.5Y7/2 灰黄	+・多				Н	(14.6)			2/8	
21 SR02	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	11、11、11、11、11、11、11、11、11、11、11、11、11、	影湯	□縁: ヨコナデ、体部: ハケ □ね: ココナデ、体部: レメ:	□縁:ハケ、体部:ケズリ後ナデ □ 148:ココナデ 体部・レメッ 1	10VR6/3にぶい黄橙 1 10VR7/4に だい番撥 5	10YR6/3にぶい黄橙 5VP7/6 器	一				良好	(173)		+	1/8	
		中			体部:指オサエ・		10YR7/2 にぶい黄橙	± **				-	(16.4)			8/2	
24 SR02	2 下層	古式土師器	影	~体部:ヨコナデ	: ヨコナデ、体部: ケズリ	10YR2/1黒 2	25Y7/2 灰黄	中・小				良好	(12.6)			1/8 未満	外面煤付着
25 SR02	2 下層	中以上問題			口縁:指オサエ後ハケ、体部:指 オサエ後ケズリ	N2/黑	2.5Y6/2 灰黄	出 出		無· 少		良好	(12.0)			2/8	体部内面炭化物?付着
26 SR02	2 下層	14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 1		小型丸底 口縁: ヨコナデ、頸部: 指オサエ   壺 後ナデ	口線: ヨコナデ、頸部: 指オサエ・ ナデ	10YR6/3にぶい黄橙 1	10YR3/1 黒褐	当				良好	(8.6)			1/8	
27 SR02	12 下層	古式土師器			口縁:ハケ後一部ヨコナデ、体部: ナデ・指オサエ	25Y7/3 浅黄 2	2.5Y7/3 浅黄	ф· ф				良好	(8.8)	10.0		2/8	体部外面媒付着
28 SR02	12 下層	古式土師器 高杯	草杯	杯部:指オサエ後ヨコナデ・マメ ッ	杯部:ハケ後ヨコナデ・マメツ	25Y7/2 灰黄 2	2.5Y7/2 灰黄	4・中				良好	(26.4)			1/8	
29 SR02	2 上屋	古式上節器	章 高杯	-	杯部:板ナデ・ナデ後ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	親· 様				良好	(17.0)			3/8	
30 SR02	2 下層	古式土師器 高杯	当杯		コナデ	10YR7/2 にぶい黄橙   10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	中・英				良好	(17.5)			4/8	
31 SR02	2 下層	古式土師器 高杯	自高杯	脚柱部:メントリ・ナデ、脚裾部:    ヨコナデ	脚柱部:螺旋状ケズリ、脚裾部: マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	<b>⊕</b>				良好		(1)	(10.3)	8/9	

内面炭化物付着

(31.0)

単・中

10YR5/2 灰黄褐

10YR7/3 にぶい黄橙

□繰:板ナデ・ナデ?マメッ□繰~体部:ハケ後指オサエ・デ 体~底部:指オサエ・ナデ

体部

N6/ JK N5/ JK 2.5Y7/1

天井~口縁:

回転力

回転ケズリ、口縁 回転ケズリ、口縁

> 杯蓋 杯 杯净 杯身 杯身

壓

36 37

細

七部器 預惠器 須恵器

脚上

SR02 SR02SR02SR02 SR02 SR02 SR02 SR02 SR02 SR02

35

上層日

SR02

33

÷

黄橙

10YR7/215.50 10YR5/6 黄褐

10YR7/2 にぶい黄橙

良好 良好 良好

良好 良好

良好

8 8/8 8/2 1/8

5.1

14.5

⊕ .

N5/ 灰 N6/ №

|同心円当て具痕後回転ナデ : 回転ナデ

天井: 口縁:

式 注 非

回転ナデ 回転ナデ

体~底部:

体~底部: 体~底部:

預恵器 預恵器 頁惠器 預恵器

不用

中層Ⅱ

38 39 40

聖

日屋中 上層田

÷

2.5Y7/1 灰白 N7/ 灰白

8/8

備考

その他

(CIII) 底径 14.2)

計測値 器高 15.9

結晶片岩

歌母

角閃石

石英・長石

内面

外丽

杯部:ハケ後ョコナデ・ナデ、脚 柱部:ケズリ後一部ナデ、脚裾部:

杯部:ハケ後ヨコナデ・ナデ、脚 柱部:メントリ後ナデ、脚裾部: ヨコナデ

高杯 令題

古式土師器

32

外面

器形

海衛

体部:板ナデ・ナデ、 マメツ

弥生土器

内面

(24.1)

底部内面黑色物付着

2/8

(6.9)

良好

中・少

N4/ FK N6/ FK

N4/ JK

□縁~頸部:回転、

: 回転ナデ

体部:

栅

中層田

4 42

N6/ JK

. #

黄橙

10YR7/3 12.55v

2.5Y6/2灰黄

回転ナデ

N7/ 灰白

 $\stackrel{\checkmark}{\rightarrow}$ 

羅

良好

(9.6) (6.6)

良好 良好

(N 土器観察表 7表 無

上層田

64

图

62 63

61

上層田

SR02 SR02 SR02 SR02 SR02

上層1 壓円

四山

43 45 46 上層田

SR02

SR02

28 23 25 25 25

SR02

不明 壓円

29

ト 思 思

4 8 6

聞 聞 聞 I

SR02 SR02 SR02

四十

SR02

22

田 田 图 聖 壓

SR02 SR02

59

SR02 SR02 SR02 SR02SR02

09

$\overline{}$
n
$\overline{}$
表
級
器観
嘂
$\ddot{\mathbb{H}}$
表
$\infty$
紙
,

						***	伊	在調		盂			1,000	計測値(	(mJ)		
1   1   1   1   1   1   1   1   1   1			器種	報				内面	7英・長石		結晶片岩	焼成	$\vdash$	器高	$\Box$		備考
1982   1982		H-	黒色土器	湿	?マメツ、底部:	体~底部:格子状ミガキ		N3/ 暗灰	÷.			良好		_	(9.7)	3/8	
			黒色土器	湿	_	体~底部:放射状ミガキ		10YR2/1 黒	± - -			良好			(6.9)	1/8 未満	
			黑色土器	溪		状ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	5Y5/1 灰	ф·+			やや敷	(15.0)	5.6	6:9	8/8	
				樵账		体部:ミガキ	10YR3/1 黒褐	10YR4/2 灰黄褐				良好				1/8 未謝	
			縄文土器	地			10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙				良好				1/8 未満	
1982   1982			弥生土器	铜				2.5Y6/1 黄灰				良好				1/8 未満	
1982   1982			弥生土器	御				10YR8/3 浅黄橙				良好				1/8 未満	
1982   1982			弥生土器	影		体~底部:ミ		10YR7/2にぶい黄橙				良好	(18.9)	16.2	7.4	8/9	
1982年   19			弥生土器	影			10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	祖・茈			良好			7.6	8/8	
1982   1982				影	_	体~底部:ナデ後ミガキ		2.5Y5/1 黄灰				良好			(8.1)	3/8	
1982   1985				影			10YR4/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐				良好	(20.9)			1/8 未謝	
NROW (NROW				影		,	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	⊕ %			良好	(28.7)			1/8 未識	体部外面媒付着
18   18   18   18   18   18   18   18				影	底部:ナデ		10YR7/2 にぶい黄橙		± ₩			良好			(2/8)	1/8	
25.02   1988/12   25.02						III	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	粗・旅			良好	(18.0)			1/8	
SNC         中級(成類) 銀鐵器         麻癬         木木 二酸二十二甲。         大井 二酸二十二甲。         NA/ 形         NA/ 所         NA/ 所         中・少         中・少         446         (15)         18 条額         18 条額           SNC         上碗(加解) 銀鐵器         商标         山澤 三橋中子 子 不加 三 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一				崇	デ後ハケ、底部:指オサ	体~底部:ナデ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR2/1 黒	型· 参			良好			11.0	8/8	
SKOZ         上層(加修7)         組織 所         加格 所         NA 形         内容 別報節         所本         日本         日本 </td <td></td> <td></td> <td>須恵器</td> <td>杯蓋</td> <td>ラ切り後ナデ、口縁</td> <td>ナデ</td> <td></td> <td>N6/ FK</td> <td>± -</td> <td></td> <td></td> <td>良好</td> <td>(15.9)</td> <td></td> <td></td> <td>2/8</td> <td></td>			須恵器	杯蓋	ラ切り後ナデ、口縁	ナデ		N6/ FK	± -			良好	(15.9)			2/8	
SRCE         市場 (RME)         前条格         高本格         開催: 回版十字・3 方向長方移灣         May (R)         No. K         中・少         中・少         自身         自身         1.8 未満額           SRCE         不明         132 (RME)         金         日本: 回版十字・3 方向長方移灣         日本: 回版十字・3 方向長方移灣         日本: 回版十字         日本: の         日本:		쩐긔	須恵器	加林		ナデ		N5/ JK	± - -			良好	(11.9)			1/8 未満	
SROG         土棚         組織         日曜: 日極にナディター         DM/ R         DM/ R         中・少         中・少         日本         日		中層 (X層上)	須恵器	高杯				N6/ JK	ф •			良好			(9.6)	1/8	
SRO2         上層 (電腦)         中・並         日本         日本 <td></td> <td></td> <td>須恵器</td> <td>皗</td> <td><math>\rightarrow</math></td> <td></td> <td></td> <td>N4/ 灰</td> <td>ф·#</td> <td></td> <td></td> <td>良好</td> <td>(11.8)</td> <td></td> <td></td> <td>1/8 未満</td> <td></td>			須恵器	皗	$\rightarrow$			N4/ 灰	ф·#			良好	(11.8)			1/8 未満	
SRO2         上層(URB)         年の底部:マメン         各へ底部:マメン         2576.3 によい資格         中並         中並         今や様         日本株         1.8 未満           SRO2         上層(URB)         土崎(URB)         本庭部:高台は付・スメン         成都: 高台は付・スメン         10787.3 によい資格         中・並         の・食・株         164         70         178 <td></td> <td></td> <td>上師質土器</td> <td></td> <td>転ナデ、底部:回転ヘラ</td> <td></td> <td>10YR8/2 灰白</td> <td>10YR8/3浅黄橙</td> <td>井・珠</td> <td></td> <td></td> <td>良好</td> <td></td> <td></td> <td>(9.8)</td> <td>1/8</td> <td></td>			上師質土器		転ナデ、底部:回転ヘラ		10YR8/2 灰白	10YR8/3浅黄橙	井・珠			良好			(9.8)	1/8	
SRO2         上版 (開展上)         現場 (報報)         上級 (開展上)         現場 (報報)         中・少         日本 (日本 )         中・少         日本 (日本 )         日本 (日本 )<		四日日	上師實上器工館			体~底部:マメツ	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y8/1 灰白	· 中 :			かや軟			(8.7)	1/8 未満	
SP15         険止土器         進 (本語・94 字 年)         体 (本語:板井・デ・ナデ         10 YR8 3 浅微鏡         25 YR 2 及后         中・並         良好         (4.3)           SP09         土崎質土器         「口線:固転・ナデ・マメッ、底部:口線・底部:回転・ナデマメッ」 10 YR8 3 浅微鏡         10 YR8 3 浅微鏡         10 YR8 3 浅微鏡         中・並         中・並         やや棒 (11.3)         (7.1)           SP06         土崎賀土器         田 口線:回転・ナディメッ、底部:口線・底部:回転・ナディメッ         10 YR8 3 浅微鏡         10 YR8 3 浅微鏡         中・並         中・並         中・         株 (11.4)         (7.7)           SD05         土崎賀土器         田 口線:回転・ナディメッ         10 YR8 2 房付         10 YR8 2 房付         中・並         中・並         株 (11.4)         (7.1)           SD05         土崎賀土器         田 口線:回転・デアイメッ         10 YR8 2 房付         10 YR8 2 房付         中・並         株 (11.4)         (7.1)           SD06         土崎賀土器         原語・マメッ         成語・回転・デアイメッ         10 YR8 2 房付         10 YR8 2 房付         中・並         株 (11.3)           SD08         土崎賀土器         成語・回転・デアイメッ         株 経路・回転・デアイス         10 YR8 2 房付         10 YR8 2 房付         中・並         株 (11.3)           SD08         土崎賀土器         株 総部・回帳・デアイス         10 YR8 2 房付         10 YR8 2 房付         中・並         株 (11.3)         (7.6)           SD08         土崎賀土器         株 (11.2)		1 4	五		回転ヘラ	ぬい・、ヘノ 体~底部:板ナデ	75Y7/1灰白	75Y7/1灰自	H + +			良好			(5.8)	1/8	十瓶山周辺窯産
SPOB         土面質土器         II 口線: 回転ナディメ、底部: 回転ナディスメ、 のリティメッス・         TRPA を応部: 回転ナディスター のドラスメンスター         10VR8A 後報         10VR8A 後報         中・並         中・並         やや様         (11.3)         (7.1)           SPOB         土面質土器         II 回転ヘラ型マスメン、底部: 回転ナディスター         II 日線 上面ボディスター         II 18 日本・立         中・並         中・並         中・並         中・並         株         (12.4)         (7.1)           SDOS         土面質土器         II I I I I I I I I I I I I I I I I I I		15	弥生土器	影		体~底部:板ナデ・ナデ		2.5Y8/2 灰白	井・珠			良好			(4.3)	2/8	
SP06         上節質士器         工厂 (2) 日本・成都: 日藤・万ヴァマメッ 底部: 日藤・成都: 回帳ナデ?マメッ (2) 日本・成都: 回帳・プラマメッ         10YR8/3 浅敷盤         10YR8/3 浅敷盤         中・並         中・並         本や軟 (11.4)         (7.7)           SP06         土筋質土器         国際・プリアスメッ 底部: 回帳・デアマメッ         10YR8/2 戻白         10YR8/2 戻白         中・並         株         (12.4)         (8.3)           SD06         土筋質土器         国 に乗: 回帳・デアマメッ         10YR8/2 戻白         10YR8/2 灰白         中・並         中・並         株         (12.4)         (1.3)           SD08         土筋質土器         正 統: 回帳・ラック後ナディッ         成部: 回帳・ディッ         10YR8/2 灰白         10YR8/2 灰白         中・並         株         株         (12.4)         (12.3)           SD08         土筋質土器         成部: 回帳・ラック後ナディッ         成部: 回帳・ディッ         10YR8/2 灰白         10YR8/2 灰白         中・並         株         株         (12.4)         (12.3)           SD08         土筋質土器         本・         大ツ         大ツ         大ツ         株         株         (12.4)         (12.3)           SD09         土筋質土器         本・         大ツ         大ツ         大ツ         株         (12.4)         (12.4)         (12.4)         (12.3)           SD09         土地質土器         工 株         本・         大・         大・         大・         (12.4)		6(	上節質上器				10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	出・			やや敷	(113)		(7.1)	1/8	
SP06         土助質士器         工 的報:回転ナデ?マメッ、底部: 口線・回転ナデ?マメッ         7.5 YRA/4 にぶい整         7.5 YRA/4 にぶい整         中・並         申・並         軟         (8.3)           SD10         土卸貨土器         工 印線・回転ナデ?マメッ         10 YRA/2 及台         10 YRA/2 及台         中・並         中・並         中・並         株         (1.2)           SD06         土卸貨土器         正 成計・回転・マメッ         日線・マメッ         10 YRA/2 及台         10 YRA/2 及台         中・並         株         株         (1.3)           SD06         土卸貨土器         正 成計・回転・マダの後・デ         成計・回転・テック後・デ         成計・回転・デ         株         (1.3)         (5)           SD0         土卸貨工器         工 成計・電         株         株         株         10 YRB/2 及台         10 YRB/2 及台         中・並         株         (4)         (5)           SD0         土地質工器         工         株         株         本         10 YRB/2 及台         10 YRB/2 及台         中・並         東・         (5)           SD0         土地質工器         工         株         本         本         本         (5)         (7.6)		6(	土師質土器		底部:		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	弾・中			やや軟	(11.4)		(2.7)	1/8 未満	
SD10         土卸貨士器         工厂		15	土師質土器	Ħ	底部:	ナデ?マメツ		7.5YR8/4 浅黄橙	単・中			華			(8.3)	2/8	
SD05         土地製工器 III 日経・マメツ         日経・マメツ         DYR8/6数         57K6/6数         FYK6/6数         中・並         軟         (1.3)           SD08         土地質土器 III 日経・マメツ、底部: 回転・ラ切・体・旋部: 回転・ラヴ・体・底部: 回転・ラヴ・体・底部: 回転・ラヴ・体・底部: 回転・ラヴ・体・底部: 回転・フメッ         10YR8/2 灰白         中・少         中・少         (6.9)           SD01         土地製工器 III マメッ         マメッ         本・底部: 回転・フメッ         大・フ         本・並         株         (7.6)		10	上師質土器	Ħ		A. I	口	10YR8/2 灰白	出・出・			から軟:	(124)		1	1/8	
SD01         土師質士器         工師質士器         本クメッ         体一底部:マメッ         体一底部:マメッ         25Y7/1 灰白         25Y8/1 灰白         中・並         軟         (7.6)	108 SDC 109 SDC	8 8	上部質土器	<b>= =</b>		□縁:マメツ 英部:回転ナデ		5YR6/6 橙 10YR8/2 灰白	日 日 分			東			(11.3)	1/8米	
	110 SD(	01	土師質土器	Ħ	トラ切・	体~底部:マメツ		25Y8/1 灰白	弾・中			兼			(9:2)	1/8	

備考							口縁歪み顕著																							
<u>1</u>	8/8	2/8	1/8	8/2	2/8	1/8	1/8	1/8	1/8	1/8	1/8	2/8	2/8	1/8	2/8	3/8	1/8 未端	2/8	1/8 米謝	1/8 / 1/8 /	8/6	17.8	2/8	1/8 未満	1/8 未端	8/2	1/8 未謝	1/8 米謝	1 /0 + 3th	1/8 米運
値 (cm)     底径   その他	(82)	(7.8)	(8.4)	(6.7)	(8.8)	(8.8)	(6.7)	(8.8)	(7.7)	1.9 (8.8)	(8.8)	(12.0)	2.6 (8.3)	(8.8)	(9'L)	(9.6)	(82)	3.8 (8.4)	(7.6)	(8.5)	(8.5)	(8.8)	(8.5)	(8.4)	(82)	(6.2)	(9.8)			
計測値口径 器高	+					(11.6)	(10.8)	(11.4)	(11.3)	(11.4)	(11.6)		(10.7)					(12.8)									(16.9)	$\perp$		
結晶片岩   焼成	*	教	秦	かや敷	兼	- 華	秦	<b>本</b>	兼	¥	- 本	やや軟	兼	やや敷	—————————————————————————————————————	- 本	兼	<b>本</b>	表 #	き か を を を を を を を を を を を を を	4	かや軟	秦	養	華	軟	か を を を を を を を を を を を を を	かを表	やや軟	
加土 角閃石 製母	╀																												無·今	
石英・長石 角	[ 湯		· ·	掛・中	湖 ·	掛・中	· ·	掛・中	掛・中	おった	掛・中	弾· 醂	料・中	お	湖・中	湖・中	· · ·	淵・中	4 年 4	H + H	1	· · ·	料・井	中・旅	当・中	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	沿 北 日 日	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	華· 参	
内面		10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/4 淡黄	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/2灰白	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	7.51 K8/4 没典恒 10YR6/2 灰蕾楊	10VR7/3じぶい帯路	1.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/2 灰白	7.5YR8/4浅黄橙	2.5Y6/1 黄灰	10YR7/4にぶい黄橙	2.578/3 淡黄	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	
(年間) (中間) (中間) (中間) (中間) (中間) (中間) (中間) (中			10YR8/2 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙 2	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙 ]	10YR7/3にぶい黄橙 1	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3にぶい黄橙 7	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙 7	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/4にぶい黄橙 1	10YR8/3 浅黄橙		1.51K8/4 浅黄檀 1.0VR8/3 浅蔷榕 1.0VR8/3 浅蔷榕 1.0VR8/3 浅 1.0VR8/3 浅 1.0VR8/3 浅 1.0VR8/3 浅 1.0VR8/3			10YR8/2灰白	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	10YR7/4 にぷい黄橙 1	2.5Y8/3 淡黄	い黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐 1	
屋 公	兵部:回転ナデ・マメッ		口縁~底部:回転ナデ?マメツ	体∼底部:回転ナデ?マメツ	体~底部:回転ナデ・マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	体~底部:マメツ	体∼底部:回転ナデ?マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	体~底部:マメツ	口縁~底部:回転ナデ?マメツ	体 ~ 底部: 回転ナデ?マメツ 牛	体~原部: マメツ 体~底部: マメツ	休~序数:フェッ	************************************	体~底部:回転ナデ?マメツ	体~底部:マメツ	体~底部:回転ナデ?マメツ	体~底部:マメツ	高台:マメツ	口縁:ヨコナデ、マメツ	口縁:マメツ	
別整 外面	ナデジマメツ	体部: 回転ナデ・マメツ、底部: 回転へラ切・マメツ	口線:マメツ、底部:回転へラ切・ マメツ	体部:回転ナデ?マメツ、底部: 回転へラ切後ナデ	体部:回転ナデ・マメツ、底部: 回転へラ切・マメツ	口縁:回転ナデ?マメツ、底部: 回転へう切?マメツ	口線:回転ナデ?マメツ、底部: 回転へう切?マメツ	<ul><li>□線:回転ナデ?マメッ、底部:</li><li>□転へう切?マメッ</li></ul>	□縁:回転ナデ?マメツ、底部: 回転へう切?マメッ	口線: 回転ナデ?マメツ、底部: 回転へう切?マメツ	<ul><li>□線:回転ナデ?マメッ、底部:</li><li>□転へう切?マメッ</li></ul>	部:回転ヘラ	口縁:マメツ、底部:回転ヘラ切・ マメツ		体部:回転ナデ?マメツ、底部: 回転へラ切後板状圧痕	□線:回転ナデ?マメツ、底部: 回転へラ切?マメツ		□線~体部:回転ナデ・マメツ、 底部:回転ヘラ切・マメッ	į,	マメツ、塩即・マメツ 回転ナデ・マメツ、底部:	マメツ 休~序經:レメッ	マメツ、底部:	マメツ、底部:回転ヘラ切・	回転ナデ?マメツ、底部:	回転ナデ・マメツ、底部:	マメツ、高台:マメツ		デ、マメツ	口縁:ヨコナデ、マメッ	
器種器形	上師管上器 皿		上師質土器 国	上師質土器 国	上師質土器 囯	上師質土器 国	上師質土器 皿	土師質土器 国	上師質土器 国	上師質土器 皿	土師質土器 国	土師質土器 皿	上師質上器 囯	上師質土器 杯	上師質土器 杯	上師質土器 杯	上師質土器 杯	上師質上器 杯	湿湿	上部質上指 %	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· 译	上師質土器 碗	上部質上器 斃	上師實土器 巍	彩	湿 3	影響	*	N.
層位器	上師學	上部	上師多	上師多	上師多	上師多	上師學	上師學	上師學	上師學	上師學	上師多	上師學	上師學	上師學	上師學	上師學	上前學	上前學	日前日十二日前	4 個個十	上部資土器	上部第	上部	上節學	上師學	上師質土岩田を土里	品 田 田 田 田 田 田 田	上師器	
<ul><li>遺物</li><li>遺物</li><li>番号</li><li>番号</li></ul>		112 SD03	113 SD08	114 SD ?	115 SD08	116 SD07	117 SD07	118 SD08	119 SD08	120 SD08	121 SD08	122 SD ?	123 SD01	124 SD03	125 SD03	126 SD10	127 SD03	128 SD08		131 SD04	SDO	90GS	SD07	SD03	136 SD07	SD01	138 SD ?	_	141 SD07	+

## 瓦観察到 罴

## 備考 残存 淵里 習問問 모 計測値 (cm) 残存長 | 残存幅 無母 胎土 角閃石 石英・長石 焼成 回回 교민 器種 層位 遺構番号 SR01 遺物番号 159

報	置る		
掛	戏什	6.3 完存	小片
	重	6.3	
	孔径	0.16	
測値 (cm・g	短径	2.35	1.4
指	長径	2.40	1.5
	現存長	1.43	3.1
	結晶片岩		
41	金融		
胎上	角閃石		
	石英・長石	⊕ %	弾・中
44		土師質・良好	土師質・良好
## 77 ## 77		2.5Y6/2 灰黄	10YR6/2灰黄褐
<b>分界 田</b> の	斜區	ナデ・マメツ	ナデ・マメツ
Spirite.	新俚	土製算珠玉	棒状土錘
400 to th	部位	土製算珠玉	棒状土錘
17 18	교교	上層田	不明
1	週伸伸り	SR02	SR02
中国中国	退物苗り	44	89

## (2) 土器観察表 第10表

(7.2)

良好

中 ・ 少

10YR3/1 黒褐

10YR7/4にぶい黄橙

放射状ミガキ

体~底部:

体部:ナデ後ミガキ?マメツ、底部:高台貼付

中・年

10YR7/4 にぶい黄橙

10YR8/4 浅黄橙

体~底部:マメツ

体部:回転ナデ?マメツ、底部マメツ

濹 濹

土師質土器

I 区包含層等 I 区包含層等

黑色土器

178

7.5YR8/4 浅黄橙

2.5Y8/2 灰白

25Y8/2 灰白

口縁~底部:回転ナデ・マメツ

口縁~底部:回転ナデ

口縁:回転ナデ、底部:回転ヘラ切り後ナデ

口縁:回転ナデ・マメツ、底部 回転ヘラ切り?マメツ

(9.7)

やや軟

(82)

良好

残存

(E)

焼成

結晶片岩

線母

角閃石

中・法

10YR8/2 灰白 10YR8/2 灰白

内面

外面 2.5Y7/1 灰白

内面

器形 Ħ Ħ

器種

層位

**香梅** SX01 SX01

L師質土器

147 148 2/8 8/2

(82) (8.8)

兼

出・出

75Y7/1 灰白

10YR6/4 にぶい黄橙

体~底部:マメツ

脚部: 回帳ナデ・回線1 底部: ヨコナデ?マメッ 体部: マメッ、底部: 回転ヘラ切・ マメッ

苯 濹

上師質土器 上節質上器

SR01 SR01 SR01

156

SR01

157 158

質恵器 上節器

医 图 严 砂層

154

体~底部:マメツ

底部:マメツ

体部: 回転ナデ? マメツ、底部: 体 回転ヘラ切り? マメツ 底部: 高台貼付後ナデ 体部: 指オサエ・ナデ後ミガキ、体 底部: ケズリ後ミガキ

幮

II区包含層等

168

具色土器 弥生土器

中・洪

10YR6/4にぶい黄橙

10YR6/4 にぶい黄橙

10YR8/2 灰白

回転ナデ

体~底部:

体~底部:

体部:回転ナデ、底部:回転ヘラ 4 切・マメッ 体部:回転ナデ・マメッ、底部: 4 マメッ

脚部:回転ナテ

単・単

10YR8/3 浅黄橙

10YR8/3 浅黄橙

10YR8/2 灰白

± . ₩

10YR7/2にぶい黄橙

10YR7/2にぶい黄橙

体~底部:指オサエ後ミガキ

(8.4) (7.9)

良好やや軟

(8.4)

崇

8/8

やや軟

(6.3)

やや軟

良好 良好 8/2 00 1/8 2/8 1/8 8/2 8

(93) (7.4)

举

中・旅 単・単 中・洪 中・旅 単・単 単・単

7.5YR8/3 浅黄橙

10YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙 2.5Y8/2 灰白

10YR7/3にぶい黄橙

口縁~底部:回転ナデ?マメツ 口縁~底部:回転ナデ?マメツ

所部:

口縁:回転ナデ?マメツ、 回転ヘラ切り?マメツ 体~脚台部:マメツ

L師質土器

172

173 174 175 176

上部器

I 区包含層等

171

口縁~底部:

口線: 回転ナデ?マメツ、底部: 回転ヘラ切?マメツ 口線: 回転ナデ、底部: 回転ヘラ 切り後ナデ

土師質土器

7.5YR7/6 橙

(82) (7.8)

2.3 2.3 2.1

(0.11 (6.7) (11.5)

良好

(8.0)

崇

海和米山	一油桶水中	四位	いた。	いた	圖教	4 編	全世							0 110011	,		展力	無事
C H	H		100.138	HH 138	HALL THE	Ī	NO.	石英・長石	角閃石	部位	結晶片岩	現存長	長径	短径	孔径	重	11.7/	C- nu
44	SR02	上層田	土製算珠玉	土製算珠玉	ナデ・マメツ	2.5Y6/2 灰黄	土師質・良好	· · 参				1.43	2.40	2.35	0.16	6.3 完存	完存	
89	SR02	不明	棒状土錘	棒状土錘	ナデ・マメツ	10YR6/2灰黄褐	土師質・良好	・・・・				3.1	1.5	1.4			小片	
							`'	1	#		#							
							-4'	· ·	H	品無常於	K							

# 第 12 票

#### 小僧遺跡(香川県教育委員会 2018年)

遺物	遺構番号	層位	器種		計測値	(cm · g)		石材	残存	備考
番号	退得軍ク	潜位.	667里	現存長	最大幅	最大厚	重量	11111	73.11	VH 45
69	SR02	上層	石鏃	1.83	1.40	0.27	0.68	サヌカイト	完存	凹基式
70	SR02	上層	石鏃	2.38	1.97	0.35	1.52	サヌカイト	一部折損	凹基式
71	SR02	上層	石鏃	2.52	1.77	0.30	1.17	サヌカイト	一部折損	凹基式
72	SR02	上層	石鏃	3.03	1.23	0.61	2.03	サヌカイト	完存	未成品?
73	SR02	下層	スクレイパー	3.76	7.22	0.83	28.79	サヌカイト	ほぽ完存	
74	SR02	下層	スクレイパー	4.04	8.90	1.26	35.45	サヌカイト	ほぽ完存	
75	SR02	上層	スクレイパー	7.29	9.54	1.69	127.13	サヌカイト	完存	
76	SR02	中層Ⅱ	敲石	8.07	8.81	3.43	357.3	中粒砂岩	完存	
100	SR02	上層 (WI層下)	石鏃	6.01	1.70	0.76	5.73	サヌカイト	完存	凸基式、表裏面に磨減痕
101	SR02	上層 (WII層)	石鏃	2.04	1.30	0.21	0.59	サヌカイト	完存	平基式
102	SR02	下層流路B (XI層下)	石鏃	1.99	1.23	0.26	0.43	サヌカイト	一部折損	凹基式
143	SD05		石鏃	1.69	1.36	0.16	0.43	サヌカイト	下半折損	
144	SD ?		石鏃	2.2	1.6	0.25	1.02	サヌカイト	ほぽ完存	凹基式
149	SX01		石鏃	1.44	1.41	0.27	0.59	サヌカイト	一部折損	平基式
150	SX01		石鏃	1.77	1.26	0.28	0.70	サヌカイト	完存	平基式
151	SX01		石鏃	2.19	1.35	0.32	1.07	サヌカイト	下半折損	
160	SR01	砂層	石鏃	1.86	1.33	0.45	0.95	サヌカイト	一部折損	凹基式
161	SR01	砂層	石鏃	2.77	1.84	0.32	1.64	サヌカイト	完存	平基式
162	SR01	下層	石鏃	3.29	1.71	0.36	1.77	サヌカイト	完存	凸基式
163	SR01	下層	石鏃	1.25	2.21	0.29	0.74	サヌカイト	半折	凹基式、一部擦痕
164	SR01	砂層	楔形石器	4.46	4.15	0.78	15.49	サヌカイト		
165	SR01	上層	砥石	12.8	8.1	8.1	1,028.45	細粒砂岩	完存	風化顕著
180	I	区包含層等	石鏃	2.0	1.4	0.25	0.67	サヌカイト	一部折損	凹基式
181	Ⅱ区包含	含層等 (ベース層)	スクレイパー	4.47	10.56	1.01	40.62	サヌカイト	完存	

#### 第13表 石器観察表

遺物番号	遺構番号	層位	器種	計測値 (cm)			樹種	木取り	TH-#	ttt: ∃v.
				現存長	現存幅	最大厚	関性	不取り	残存	備考
77	SR02	下層	板材	39.8	8.7	2.6	コナラ属クヌギ節	柾目	上下端折損	腐食顕著
78	SR02	中層Ⅲ	板材	29.0	5.1	1.8	サワラ	追柾目	上下端折損	腐食顕著
79	SR02	中層Ⅲ	木杭	17.5	3.3	2.2	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸太	上端折損	
166	SR01	下層	建築部材?	71.7	9.9	2.7	スギ	追柾目	下端折損	表面炭化
167	SR01	下層	木杭	40.2	7.8	6.6	アスナロ	芯持丸太	上端折損	腐食顕著

#### 第 14 表 木製品観察表

遺物番号 遺	遺構番号	層位	器種		計	則値(cm·	g)		44 fift	残存	備考	
	退得電り			現存長	最大幅	最大厚	内径	重量	材質			
153	2	SK06		不明鉄器	13.72	6.33	0.25			鉄	破片	
15	3	SK06		銅銭	2.28	2.28	0.09	0.64	2.05	銄	完存	「寛永通寶」

第 15 表 金属器観察表

# 写真図版

#### 図版3 遺構写真1



遺跡遠景(南より)





I - ②区全景(東より)



Ⅰ - ①区全景(東より)



I - ①区 SR02 東壁土層断 面(西より)

図版5 遺構写真3



I - ①区 SR02 検出状況 (北より)



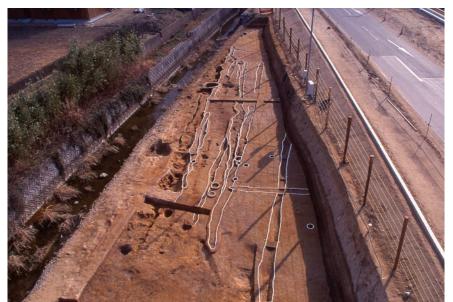
I - ①区 SR02 東半部全景 (東より)



I - ①区 SR02 西半部全景 (西より)



I - ①区 SR02 北半下層 遺物出土状況(西より)



I - ②区全景(北より)



Ⅱ - ①区全景(東より)

図版7 遺構写真5



Ⅱ - ②区全景(北より)



Ⅱ - ①区全景(西より)



Ⅱ - ②区全景(北より)



Ⅱ - ①区北壁土層断面 (南西より)



Ⅱ - ①区 SR02 下層流路 A土層断面 (南より)



Ⅱ - ①区 SR02 下層流路 B土層断面(南より)

図版9 遺構写真7



Ⅱ - ①区 SR02 下層流路 B遺物出土状況 (南より)



Ⅱ - ②区 SRO2 下層流路 全景 (北より)



Ⅱ - ②区 SR02 下層流路 全景 (西より)



Ⅱ - ②区 SRO2 下層流路 A全景 (北より)



Ⅱ - ②区 SR02 下層流路 全景 (北より)



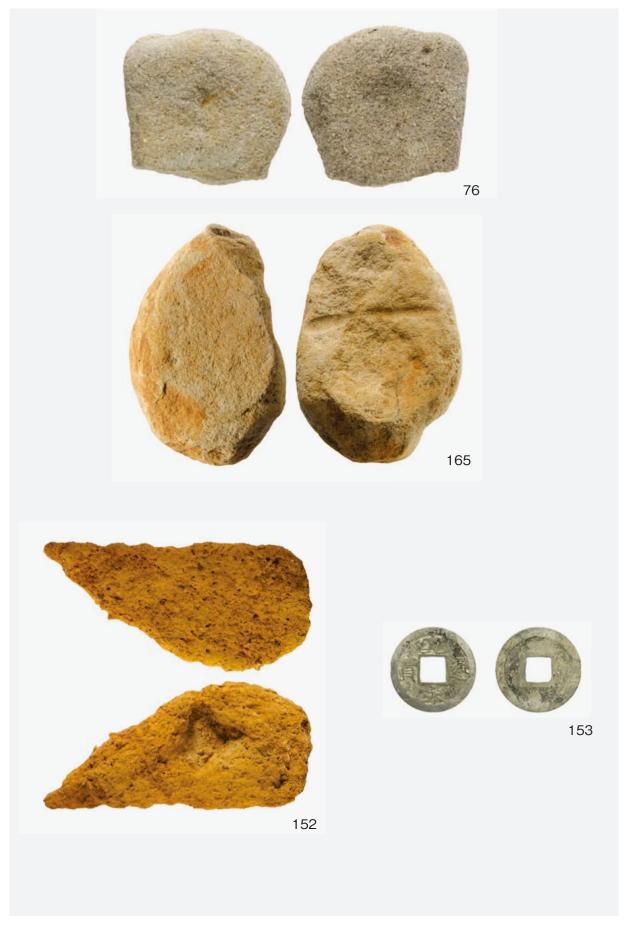
Ⅱ区より I 区遠望 (南より)

図版 11 遺物写真 1 (土器)











### 報告書抄録

ふりがな	ふりがな こぞういせき											
書名	小僧遺跡											
副書名	中小規模河川古川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告											
巻次												
編著者名 蔵本晋司(編)、株式会社イビソク												
編集機関 香川県埋蔵文化財センター												
所在地	〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 Tel. 0877-48-2191 Mail. maibun@pref.kagawa.lg.jp											
発行機関名	香川県	效育委員:	会									
発行年月日	2018年3月7日											
ディップ * * * * * * * * * * * * * * * * * * *	新 <sub>1</sub>	がな生地	市町	-ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因			
小僧遺跡	************************************		37207		34° 14′ 21″	134° 19′ 54″	2000年1月1日~ 2000年3月31日	1,611 m²	河川改修			
所収遺跡名	種別	種別 主な時代			主な遺構		主な遺物	特記事項				
	集落跡生産	縄文時代		自然河川 1		縄文	上器、石器					
		弥生時代 古墳時代 古代		自然河川 1			上器、土師器、須恵器、 現、土製品、石器、木					
小僧遺跡		中世		柱穴 16 土坑 3 鋤溝群 1 性格不明 1		土師分	質土器、黒色土器					
		近世	土坑 11 水田 1 自然河川 1		土師知製品	質土器、瓦、銭貨、木						
要約		遺跡は、与田川と古川により形成された沖積平野南東部の平地上に位置する。東に隣接する丘陵上には、全長約38mの前期前方後円墳の大日山古墳が所在する。検出された遺構には、縄文時代後期から古墳時代にかけて流下した、旧古川の自然河川がある。自然河川からは古墳時代前期前葉のまとまった土器が出土し、大日山古墳築造集団との関係が注目される。また、自然河川は中世前葉には埋没し、以後調査地周辺は耕作地として利用されたことが明らかとなった。										

#### 中小規模河川古川改修事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

#### 小僧遺跡

2018年3月7日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191

E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp

発行 香川県教育委員会

印刷 ワールド印刷株式会社

